

\*\*\*\*\*  
\*承\*

マルクス以前のいわゆる空想的社会主義者たちの試行錯誤の中に、興味深い実験がある——と、例の社会科教師が語ったことがある。

外界から隔絶した村を作る。そして、その村の住人にどんな仕事でもいいから各々の望む好きな労働をさせる。麦を育ててもいいし、牛を飼ってもいいし、歌や小説を創ってもいい。そして、その労働の成果物（つまり、できあがった麦や牛、歌や小説）を提供する代わりに交換券を与えられる。ちなみにその与えられる交換券の量はどんな仕事であっても、働いた時間に応じて与えられる。例えば、麦を育てても、牛を飼っても、歌や小説を創っても、そのために費やした時間に応じて、一時間分、二時間分と交換券が与えられる（労働価値説というヤツだ）。そして、その交換券を使って、他に必要なものを手に入れることができる。

もっと具体的に言えば——ある人が二百時間かけて、麦を育てる。収穫した麦の半分を交換券にする。これで、ある人は二百時間かけて手に入れた麦の半分（＝百時間分の労働に相当する麦）と百時間分の交換券を手になることになる。さらにこの百時間分の交換券を牛にする。これでその人は百時間分の麦と、百時間分の牛を所有することが出来る。これを繰り返して、生活に必要なものを揃えていく——という寸法だ。

資本家に搾取されることもなく、しかも、誰もが自分の望んだ職業に就く事ができる理想社会——を目指した実験だったが、大方の予想通り、これは失敗した。

社会科教師が『その理由を推測してみて』と生徒に告げると、いくつかの意見が上がった。最も多かったのは『時間だけを基準にすると、手を抜いてダラダラと仕事する怠け者が増える』という理由だ。しばしば語られる旧ソ連崩壊の一因である。

しかし、社会科教師は首を横に振った。  
それはこの実験で判明した『重大な問題』を改善して、初めて発生する『些細な問題』なのだ。

たしかに『時間だけを基準にすると、手を抜いてダラダラと仕事する怠け者が増える』というのは問題だ。しかし、それだけならば、最低限の生活必需品は概ね手に入る（某北の国ほどの大ポカをやらない限りは）。疑うなら、パートタイマーの働き振りを見ればいい。一般にパートタイマーには時間を基準にして給料が支払われる。しかし、一定の仕事はしてくれ。君らが二十四時間コンビニで好きなモノを買えるのは、時給幾らで働いている人たちのおかげだということ忘れてはいけない——と教師は上流階級の少女たちへ戒めの言葉を送った。

たしかに中長期的にはやる気モチベーションの低迷は問題になってくる。非正規雇用の増大が社会問題とされる一因だ。しかし、短期的にはさほど問題ではない。実際、旧ソ連は何だかんだといって、

半世紀以上も持ち堪えたのである。

ところが、この実験ではそのはるか前で、失敗した。それも瞬く間に失敗した。その理由は『すぐに生活に必要なものが足りなくなった』からであった。

真の問題は『必要なものが生産されなくなる』という点であったのだ。

何しろ、皆が各々好き勝手に自分の生産したいものをつくるのだ。あるところでは、小麦ばかりが生産され、他のものがまるで生産されない世界になる。あるところでは、牛ばかりが生産され、他のものがまるで生産されない世界になる。あるところでは歌や小説ばかりが生産され、他のものがまるで生産されない世界になる。朱乃は前二者なら、何とか食い繋げるのではとも思ったが、冷静に考えれば、衣類や住居、それに医薬品や警察力などが生産されないわけであって、遠からず破綻するのは確実である（大体、これでは交換券の意味がない。原始時代に戻れというようなものだ）。そして、後一者は考えるまでもない。歌や小説ばかりが生産され、他のものがまるで生産されない世界——絶望郷とはこういうのを指すだろう。一年も立たずに食っていけなくなることを請け合いである。

社会科教師はこれを以って資本主義の本質を示すと語った。善かれ悪しかれ、人間は自分ではなく他者が必要とするものを生産せねばならない。そうしなければ、社会を維持できない。そして、資本主義とはそのためのシステムなのだ。自分が生産したいモノではなく、他人が必要とするモノを生産するように、需給関係を以って、穏便に強制するシステムこそが資本主義なのだ。自分自身のためでなく、他の誰かのために働いてこそ、初めて金銭を得、生きていくことができる。

畢竟『資本主義の本質とは思いやりである』のだ——と。

それは事実なのかもしれない。

しかし、朱乃のような人間にとって、これほど忌々しい事実はない。

何故なら、それは『人間は己の望む職業ではなく、他人の望む職業に就かなければならない』ということだからだ。『己の望む己ではなく、他人の望む己でなくては生きてはいけない』ということだからだ。

勿論、己の望む己と他人が望む己が一致している場合もある。

だが、それはおそらくとても幸運なことである。

そして、世界のすべての人間が幸運であるなど、ありえないのだ。

糞尿が飛び散っている公衆の便器を延々拭き続ける仕事を求められることもある。

腐臭の漂う産業廃棄物を延々右から左へ運び続ける仕事を求められることもある。

放射線の吹き荒れる原子炉の中で延々螺子を締め続ける仕事を求められることもある。

安い給料で、何の保証もなく、同情と軽蔑と冷笑の入り混じった視線にさらされながら、し

かも、それは『まじめに頑張れるいつか報われる仕事』ではなく、『死ぬまで同じ事を繰り返さ

せられる仕事』だったりする。

そういう己を求められた人間にとって、希望とはどういうものなのだろうか？  
閉じていく未来の中で——人は何を見るのだろうか？



四月の日々は穏やかに過ぎていった。

変わったことと言えば、件の社会科教師がこの学園の株価下落を嘆いていたことぐらいだ。私立とはいえ、学校法人が株式を公開できるとは、規制緩和もそこまで進んだか——と、朱乃は呑気に考えていたが、彼にとっては、死活問題らしい。何しろ、この学園では給与の一部を株式の形で支払う。教師の意欲と結束を高めるためという名目の露骨な賃下げ手法で、その結果、今日の彼は昼飯抜きなのだ。

……という愚痴を聞かされるくらい凡庸な時間が流れていった。

しかし、実のところ、朱乃はビクビクしていた。

呉羽に好意を抱いている故に彼女からの嫌悪を恐れているのだ。中々、本題に踏み込めないのがその一端である。『煩わしい女』と思われたくないことがその原因であり、証左でもある。それでも饒舌で多弁なのだ。いや、実際、朱乃は『煩わしい女』なのだろう。人の話を聞くよりも、己のことを人に話したい性質なのだ。

しかし、そんな奴は往々にして疎まれる。人は誰もが他の誰かに愛されたいと思っているのだから。己のことばかりを話す自己愛の塊は『他の誰かの《愛されたい》という利益』に合致する存在ではない。結果、疎まれ、嫌われる。

一時期の朱乃はそんな人間だったような気がする。いや、今でもきっとそうなのだろう。

だから、その裏返しで、呉羽に踏み込めないのだ。

今まで、他者に興味がなく、自分のことしか考えていなかったために、踏み込むための技術に欠けているのだ。

朱乃が異様な髪の女性にょしょうと出会ったのはそんな頃だった。

日曜補習の帰り、駅前という人込みの中——しかし、彼女は明らかに他の群集とは区別できた。

何しろ、彼女の髪は冗談みたいに長かったのである。いや、太股まで届く髪というものを、間近で見たのは初めてだった。たしかに、坐窟学園には比較的長い髪の女性が多い。だが、ここまで長い髪をしている女性はいない。男性ならば、なおのことだ。

昔の絵物語などなら、平気で『身の丈よりも長い髪』が出てくるが、あれは一切万事を端女はしための

類に任せていた平安貴族などの話だ。現代日本でまともに生活するなら、あまりにも長い髪はどう考えても邪魔である。

その上、その長い髪は女郎蜘蛛の糸のような繊細で、女郎蜘蛛の巣のように濃密で、女郎蜘蛛の節のように青黒い。その黒さの極地ともいえる青黒さに、朱乃は思わず心を奪われてしまう。

しかも、彼女にはそれを括ったり束ねたりして、纏めておこう気配がまるでない。惜しげもなく風に棚引かせている。おかげで、人目を引く引く。それこそ、幻想から、抜け出てきたような現実離れた気配をその髪は醸していた。

そして――、

「はい、お嬢さん、幾ら？ 私、十万までなら出せるよ」

「……」

彼女はアラブ人とは違う流麗な発音で、朱乃を誘ってきた。

「ああああああ、無視しないで、お姉さん、寂しいようーっ！」

「えーと、今、困窮しているわけではないので。ええ、結構です」

\*\*\*

結局、数分の後、朱乃は彼女と共に近くの喫茶店に入っていた。

あからさまに怪しい上に、妖しい女性に朱乃が付いていったのは、別に十万円が欲しかったからではない。まして、美しい髪の色香に騙されたわけでもない。彼女が「ほらほら、見て見て」と古い瑩窟学園の学生証を見せたからだ。そこには

『南山御さ青（みなみやま みさお）——上記の者は本学の学生であることを証明する』  
と書かれていたのである。

色々、気になるお年頃なのか、入学時期や有効期限のところは黒く塗り潰されていた。しかし、その学生証はかすかに黄ばんでおり、それが重ねてきた時間に真実味を与えている（もつとも、その意匠が朱乃のものと同じであったのだから、それ程、古いものでもないはずだ）。

そして、そこには勿論顔写真が貼られており、その中には——今よりいささか幼く硬い雰囲気だが——たしかに『彼女』の姿があった。

——要するに、この『南山御さ青』なる人物は朱乃の先輩、元瑩窟学園生徒なのだ。少なくとも、彼女はそう主張していた。朱乃としても、疑う理由はない。瑩窟学園では、その社会的評価を維持するため、学生証に日本銀行券並みの偽造防止策を費やしている。

一応、淑女の嗜みとして、後で学園の在籍者記録を漁ることも考えていたが、それは『南山

御さ青』が朱乃に現金や契約書などのやり取りを要求してきた場合の話だ。

そして、その彼女が語るには、先程のは只の冗談であり、自分はただ純粹にお茶をしたかったのだという。すると、たまたま、母校の制服が見えたから、冗談交じりに誘ってみたのだという。そこで、朱乃は初めて自分が制服を着たままだということに気付いた。補習の後に書店に寄ろうと、制服姿のまま、駅前に出てきたのだ（面倒でも私服に着替えておくべきだった）。とはいえ、先輩には敬意を払わなくてはならない。例えそれが張りぼてであったとしても。お茶の一杯ぐらいは付き合ってもかまわないだろう。一応、『お茶しよーよー。奢るからさー』と相手は言っているが、朱乃は既に財布を用意している。しかし、

——我ながら、無用心ね。

とも思う。だが、朱乃は何故か『南山御さ青』に逆らえなかった。あえて言えば、その蓮っ葉な口調のせいか、彼女は、どこか、髪を解いた彼女に似た風を帯びていたのである。

——よく考えてみれば、この人は幾つで、今、何をして暮らしているのだろうか？

失礼にならないよう珈琲を飲む素振りをしながら、朱乃は相手を観察する。

先程『お茶』と言っておきながら、熱々のステーキ定食大盛りをホクホク笑顔でガツガツ食する南山御さ青の格好は——下は、過激に切り込んだカットオフジーンズに何故かゴツイ兵隊靴アームリーブーツ上は、後首部で紐を結び吊るす類のハーフトップキャミ一丁というシロモノだった。ぶっちゃけた話、露出度が高い。

あまりにも長く見事な髪に、心理的には視線が惹かれるし、物理的にも視界が遮られている。だから、道を歩いている時はまだ気にせずいられた。だが、こう真正面に座っていると——何しろ、細いだけの朱乃と違って、柔らかかさやしなやかさを具えた手足が剥き出しになっているのだ——目のやり場に困らずにられない（ついでに言うと、朱乃の纏う古風で貞淑な瑩窟学園のセーラー服との組み合わせに、周囲は結構注目していた）。

下のジーンズは肌にぴったりと張り付くような——ひよつとしたら、わざと小さめのものを履いているのかもしれない——状態になっている上、裾が切り落とされたまま、切り口の糸がそのまま垂れており、解れた繊維が現在進行形で布地を薄くしている。

——これ、そのうち、ショーツとか、見えちゃうじゃないかな。

有り体に言って、朱乃はどぎまぎしてしまう。

上のキャミソールも肌に密着する簡素なつくりで、あまりに薄地なものだから、突起が見えそうにすら……。

——……ていうか、ノーブラ？

それは色々まずいではなかるうか。朱乃のようにBでも、付けていないと結構危険だといふのに、それはかなりヤバイだろう。別に測ったわけではないが、見ただけでわかる。朱乃と違い彼女は既に女性として完成しており、その上で、でっばたり、引っ込んだりしているのだ。

「あ、ちなみにスリーサイズは上から、八七、五八、八五で、Eだよ」



「……誰も聞いちゃいませんが、そんなこと」

「えー。知りだけな雰囲気だったよ。あたし、そういう空気を読むのには自信があるの。何なら、その制服の下を中てて見せようか？」すると彼女は目を瞑り、「上から、七六、五六……」

「……お黙り下さいませんか？」

「はい」

お茶らける御さ青。冷たく突き放した朱乃であったが、実は焦ってもいた。何しろ、彼女の提示した数字はあたっていたのだ。呉羽のように覗き込んでもいないのにどうして……。

「でも、素敵な体付きね」とニヤニヤとする御さ青。

……とにかく、大学生かフリーターか何かだろうと、いわゆる『正社員』ではないだろうと、朱乃は推測した。人当りはよかったが、定職に付いている人間の具える社交性とは何か違うものがあつた。

正規雇用され、会社組織の中で日々を過ごしているものには、多かれ少なかれ、ある種の『疲れ』が顔に出てくるものだ。ところが、彼女にはそれが無い。そういった『疲れ』とは無縁のものに特有の若さといつてもいいし、幼さといつてもいい。彼女が纏っている気配にはそんな何かがあつた。

どこか、子供のような印象がある。

ふと朱乃は——青黒いとは、すなわち『黝い』——幼き黒さと書くのだと気付いた。

「……それで、南山さん？」

「つれないなあ。ミサオと呼んでよ。なんなら、ミサオっちでもいいよ」

「全力で遠慮させていただきます」

「あー、何それ？ 素直に貞操の『操』にしておけばいいものを、妙に捨る辺りがDQNっぽい名前なんて、口にするのも汚らわしいってヤツ？」

「ド……どきゅん？」

「あー、あれよあれ、『人の名も、目慣れぬ文字を付かんとする、益なき事なり。何事も、珍しき事を求め、異説を好むは、浅才の人の必ずある事なりとぞ』ってやつ。ま、ぶっちゃけると裴松之曰く『名や字が犯されたくないなら、名など付けなければ良い』『こんな事をやっているから、妻子が皆殺しになるんだ』てな感じの名前よ」

「卜部兼好の徒然草？ 裴松之とは誰でしたっけ？ ……論語や史記の類ではないし……」

「あー、知らなくて当然。字を世期あやなっていう宋代の人——この三国志の注釈では有名だけど、まあ、それくらいだしね。というか、すらつと兼好法師の本名が出てくるなんて凄い。さすがはあたしの後輩」

彼女は感心したようだったが、朱乃の方も少し安心していた。勿論、演技の可能性もある。だが、こういう役に立たない古典教養まで詰め込んでいる辺り、なるほど、よくも悪くも自分たちの学園の気風に近い。付け加えるなら、朱乃はいわゆる文学少女であり、この手の話題が

嫌いではない。

「お褒めに預かり光栄です。それと『御さ青』という名——日本語として、然程おかしくないと思えますよ。たしかに『さ』という上古の接頭語へ、さらに『御』という接頭語を重ねるのは不自然にも思えますが『真っ青』という言葉もありますし……」

それに『朱乃』だって、それ程読みやすい名ではない——と続ける前に、蜘蛛の如き黒髪の主は口を挟んだ。

「実はそっちが元なんだってさ。小さい頃は病弱で、産まれた時に顔色悪かったから、『青』って、付けられたらしい。ちよつと安直過ぎて笑えるよねえ」

「……」

朱乃は笑えない。朱乃も産まれた時に、髪が赤みがかったので、『朱乃』と名付けられたのである。齢を重ねるにつれて、黒みを帯びていったが、それでも色素が薄いことには変わらない。光の当たり方によっては、今でも赤毛にも見える。それだけに、眼前にたゆたう立派な黒髪には正直憧れてしまう。

「でも、ま、この名前、結構気に入っているのよ。中国にいた時なんて、『阿青』なんて呼ばれてさ。なんだか謎の天才美少女剣士っぽくって、いい感じでしょう？」

「……美少女剣士？」

「あ、そういうのは読まないのか」

そう言って、彼女は「うーん」と背伸びをした。

ジーンズは股上が浅い類だったので、ハーフトップキャミとの間から、綺麗なお臍が丸見えになる。いや、それどころか、黒いレースのショーツがちらりと垣間見えたくらいだ。

美人の素肌は嫌いではないが、無意味に色気を振りまくことには抵抗のある朱乃としては、

——これは……どうなのだろう……？

という気分になって、唾を飲み込んでしまう。

「欲情？」

「しません！」

「じろじろ見ているくせに？」

「見せられているんです！」

「つれないなあ」

「……帰っていいですか？」

朱乃が席から立ち上がろうとすると、御さ青は「ああー、行かないで、私を見捨てないで」と縋り付いてきた。しかも、微妙に変なところを触ってくるのだから油断ならない。挙句の果てに「うーん、女子高生の匂いがする」とまでほざき出した。

さすがのこれには周囲の視線も集まってくる。ついでに、朱乃のものよりも随分大きな膨らみが当たって、平静を失わせる。

「……わ、わかりました。もう少しお付き合いしますから、離れて下さい。それとあまり変な  
こと言わないで下さい」

「はい」

こいつ、わかってやっているといるんじゃないかな——という疑いがたつぷりのにやけ面で自分  
の席に戻る御さ青。で、あったが、席に座って、一口二口ステーキ定食食べた後、急にしゅん  
とする。そして、

「やっぱり……おかしいかな？」

と、その女はどこかの誰かのような態度を取った。

「いや、これでも日本語には自信があるのよ。何しろ、母語なんだから。でも、若い女の子と  
話すなんて、久々でさ」

「……そうなんですか？」

「そうだよ。社会に出たらね、もう女子高生の匂いなんて……はい、わかりました。すいませ  
ん。このネタは控えさせてもらいます」

全身全霊を込めて睨むと南山御さ青は大人しくなったが「でも」と付け加えた。

「若さが羨ましいと思っているのは真実だよ。人生の選択肢って、歳を重ねるごとに減ってい  
くからさ。あたしぐらいの歳になると、もうあらゆる意味で後戻りができなくなっている。未  
来という言葉も聞いても、どんどん閉じていく印象しかないもの」

「閉じていく……未来？」

「そ。既に与えられた諸条件に基づき確定されており、あとはそこへ収束されていくだけの事  
象の地平線」そして、彼女は定食に付いてきた緑茶をズズとすすった。「でも、君はまだ若い  
んだから、将来の夢とか、成りたいものとか、好きなこととかさ」

「……将来……」その時の朱乃には怯えの色があったと思う。「恥ずかしい話ですが、あまり建  
設的なことは考えてませんね」

「そ？ でも、十代の女の子なんて、『本当の自分』とか探しちゃったりするものでしょ」

ケラケラと笑いながら語る御さ青に朱乃は皮肉な邪推をした。

——……この人、もしかして、『ライトノベル書き志望の臨時職員（二十五歳）』とか、『ミ  
ュージシャン志望のフリーター（三十歳）』の類？

内心では侮蔑に似た感情を覚えた朱乃であったが、しかし、勿論、それを表に出すようなこ  
とはしない。

「そうはいっても、成りたいものと成れるものは別ですから……」

と、当たり障りのない答えを返すに留める。だが、御さ青は意外にも、

「どうせやるなら、好きな事を仕事に——なんて、考えは甘い？ 好きでもないことでも一生  
懸命に努力すべきで、それで初めて生活たつきとしての道が成り立つ？」

と、無垢な童女のように小首を傾げ、朱乃の内心を言い当てた。



「私も昔はそう思っていたのだけだねー。でも、好きでもない仕事でも一生懸命に努力すべきだって——と言う考え方も、また、甘いような気がするな」

「そう……ですか？」

「そうよ。だって、この考えには一生懸命に努力すれば、嫌いな仕事でも、続けられるという背面定理が隠れているでしょ。でも、現実世界が評価してくれるのは、努力ではなく、結果を齎す能力。そして、普通、人間は自分が好きなものは得意だけど、嫌いなものは苦手なの。いや逆かな？ 往々にして、人間は得意なものは好きになるけれど、苦手なものは嫌いになるというべきかな？」

たしかにそれはそうだ——と朱乃は思った。

当たり前の話だが、人間は成果を期待できるから努力するのだ。念力で空を飛ばうと努力する人間が少数なのは、それが成果を期待できそうにないからである。そして、その成果の期待できない努力を美德とするものは、少数であるだけでなく、愚鈍でもある。労力にせよ、時間リソースにせよ、金銭にせよ、人生の資源は常に有限なのだから。

それ故に、人は効率的な資源リソースの配分を行う。より大きくより長くより確実な見返りを期待できるところに、人は多くを費やすものだ。突き詰めて考えれば『好き』だという感情の正体はそういった配分基準なのかもしれない。『好きこそモノの上手なれ』なんて嘘だ。この諺は相関においてはそれ程誤りではないが、因果としては誤りなのだ。『上手なればこそその好きモノ』が正しい。疑うのならば、塾宿学園の体育館にでも、行けばいい。放課後、一生懸命にバスケットボールの練習に励んでいるのは、皆、運動が得意な少女たちばかりである。間違っても、朱乃のような運動オンチは混じってはいない。仮に、朱乃がああいう場にい続けても、辛いだけだろう。朱乃では、どれだけ、練習を重ねてもろくに上手くなれないに決まっているからだ。逆に言えば、ああいう場で頑張っているのは、大なり小なり、練習さえすれば、ある程度は（精神的な充実や他者からの尊敬を得られる程度には）上手くなれる人間、成果を出せる人間なのだ。そして、成果が出るから、嬉しい。その感情を好きというのだろう。

——要するに兎と亀なんだ。

寓話においては、兎が忘れてくれたから、亀は勝てた。しかし、どうして、兎はわざわざ己の得意な勝負で忘れてくれたのだ？

現実は大抵逆だ。怠けるのは亀であって、兎ではない。

何だかんだとあって、人間はそれなりに合理的な生き物なのだ。だから、世の中、『下手の横好き』は珍しい。そして、社会に出れば、その傾向はより強化される。生きていくための合理的な選択が必要とされるから、無能は罪悪となる。そのため、『下手の横好き』はさらに激減する。少なくとも、そんな人間を雇うものはいない。無駄な出費は誰だって避ける。そして、誰からも雇われない者、誰からも必要とされなかった人間は、ひっそりと社会から消えていくしかない。

……朱乃は彼女を侮ったことを恥じた。

やはり、年輪の差とは大きい。なるほど、一つの正論である。よく考えてみれば先程までの発言で、彼女の虚無的なまでの達観は垣間見えていたのに——どうして、自分は彼女を見下そうとしてしまったのだろうか？

「いずれにせよ、はつきりしているのは、一・生・懸・命・に・努・力・し・た・く・ら・い・で・適・性・の・な・い・仕・事・を・続・け・さ・せ・て・も・ら・え・る・ほ・ど、世の中甘くはないということよ。高度経済成長期ならともかくさ」

御さ青の言いたいことは朱乃にもよくわかる。

適正のない仕事ということは、得意でない仕事、本人の特殊な技能に依存しない仕事ということだ（そして、それは『好き』でない仕事と同義かもしれない。前述の通り、『上手なればこの好きモノ』なのだから）。あるいは誰にでもできる仕事ということになる。

要するに『代わりはいくらでもいる仕事』ということだ。

そういう仕事では、努力はほとんど意味を成さない。

何故なら、もし、努力が成果に結びつくのなら——隣で働いている人は努力していないの？——ということになるからだ。そして、朱乃は『自分だけが努力をしている』という歪んだ選民思想に溺れられるほど単純ではない。

努力は成功の必要条件であって、十分条件ではないのだ。

もし、それが『他に代わりがない仕事』なら、努力さえすれば、ある程度は評価してもらえるかもしれない。比較すべき代わりの人間がないのなら、頑張っている人間はそれだけで価値がある。あるいは、かつてのように常に大量の労働力需要があった時代なら、どんな仕事であっても『他に代わりがない仕事』だったのだろう。

しかし、今は違う。世の中は『代わりはいくらでもいる仕事』ばかりだ。どんなに頑張っても、いつ首を挿げ替えられるかわかったものではない。だから、人は『他に代わりがない仕事』『自分にしかできない仕事』を探そうとする。それは『代わりはいくらでもいる仕事』に己の人生を賭けるのはあまりにも危険な博打だからだ。

「あ、ごめんね。なんだか、説教っぽい上に、愚痴っぽくなっちゃって」

朱乃を暗澹にさせた元凶は「あんまり気にしないでよー」とケラケラと笑った。

「いえ……でも、それなら、どうすればいいんでしょうかね？」

「どうすればって？」朱乃の問いに御さ青は再び小首を傾げた。

「自分の好きなことが商売として成立するようなシロモノではなかったり、そうでなくても、その分野で食べていけるのがほんの一握りだったりする場合は、どうすれば、いいんでしょうね？」

「どうにもならないわね」

あまりにもあっさりと御さ青は語った。

「小さな人間の力なんて、この大きな世界の力の前では、川に落ちた葉っぱみたいなものよ。」

ただただ流されていく他ない」

「……それは少し悲観的過ぎやしませんか？」

「そう？　じゃあ、ここに来るまでに路上生活者ホームレスを何人見てきた？」

「……」

この国の路上生活者は諸外国に比べれば、遥かに少ない。それが政府の言い分であり、また事実とそれ程かけ離れてもいない。しかし、今の御さ青の言葉に対する返答としては

——数え切れなかった。

というのが正しいだろう。

「臭くって、汚くって、卑しくって、最悪だったけれど——でも、あの人たちはあの人たちで、どうにもならなかったんじゃないのかな」

「……それが摂理だと？」

「近代化を終えてしまった国の宿命というところかしら？　この国は残念ながら、もう近代国家近代国になってしまったんだろうねー」

「『勝者の代償』……ですか？」

すると、御さ青はまずきよんとした顔をし、次に驚きをあらわにし、「The Future of Success? Robert. B. Reich?」と確認し、最後に感心したように口笛を吹いた。

「……私が読んだのは邦訳版ですよ」

「それでも、結構オタクっぽいものを読んでるじゃん」

……だったら、その原題と著者を知っているあなたは何なんですか——と思わず、尋ねそうになった朱乃であるが、すぐに思い止まった。どうも、発音からして、彼女が読んだのは原書の方ではないかという実に劣等感をそそる推測が成り立ったからだ。

だから、朱乃はただ

「まあ、趣味です。好きなんです」

とだけ答えた。

「ふーん、でも、それで食っていくのも難しいよ。成りたい奴は大勢いる割に、雇いたい人はそれ程いないからね」

「……わかっていますよ」

最後の一言は少し棘のある言い方になってしまったらしい。御さ青は「ごめんごめん」と宥め、己の未熟を悟った朱乃はさらに不愉快になった。

そして、二人で店を出て、「奢るよ」という御さ青の申し出を朱乃がはっきりと断った後、意外とあっさりと別れることになった。

ところが、別れ際に、彼女は妙なことを尋ねてきた。

「そうそう、朱乃ちゃん朱乃ちゃんは異世界に召喚される方法って、ご存知？」

「……は？」

「ああ、もう、終わっちゃったかな？　ちよつと前までは『自衛隊』ってところへ行けば、異世界に召喚されたりしたのよ」

「……？」

「実際、いるんだよー。軽い気持ちで入隊したら、いつの間にか中東っていうある種の異世界に召喚されちゃった人たちがさ。今でも海上交通路確保のために、インド洋の辺りに召喚されちゃうことはあるみたいだしね」

そして、御さ青は無邪気な笑みを浮かべた。

「個人的には、結構お奨め。きつと、いくらでも、あなたの世界を覆してくれるよ」

そこで、朱乃はようやく気付いた。

——自分はいつ彼女に『朱乃』と名乗ったのだろうか？

\*\*\*

「ねえ、呉羽……異世界へ召喚される方法って、知っている？」

朱乃は呉羽と共に山道を歩いている。その最中、唐突に尋ねてみた。

呉羽は「へ？」と戸惑う。当然といえば、当然のことだ。ところが、しばらく、真面目な顔を経由してから、彼女は滔滔と語った。

「うーん。英語を勉強した上で……あ、フランス語の方がいいかな？……それとできれば、自衛隊とかに入って訓練を受けられれば、最良かも。あとはアフリカとか中央アジアの紛争地帯に行つて、小銃掲げて『自分は閣下の理想に共鳴したものであり……』とかなんとか言えばいいよ。きつと」

しかし、呉羽は露骨に顔をしかめた。

「でも、あまりお奨めできる手段ではないわね」

鬱蒼とした緑の中であっても、呉羽の顔の歪みが疲れてないことははっきりとしている。朱乃の後ろを付いてくる呉羽は、初めて部屋を訪ねた時のように、やはり、汗は流さず、息は乱れず、むしろ、歩みの遅さをまどろかしく思っているようだ。

一方の朱乃は以前と同じくヒーヒーという状態である。何せ、慣れない山道だ。もう、疲労困憊で、いつ倒れてもおかしくない。

当初、呉羽の後を自分が付いていくという形にしよう——と朱乃が提案した時に、呉羽は大反対した。何でも、最後尾には体力がある者がつくのが常道だという。なるほど、結果を見れば、確かにその通りだった。もし、呉羽の後を朱乃が付いていく形なら、あつという間に朱乃が取り残されてしまっただろう。しかし……。

——まずい。下らないことを聞くべきではなかった。

口を開いたことで、ますます、呼吸が乱れる。足元がふらつく。

「大丈夫？ なんなら、あたしが背負っていいか？」

「……本当に余裕なのね、呉羽は。何だか腹が立ってきたわ」

「いや、元々、あたしのわがままだったんだしさ」

呉羽の言葉に間違いはない。もっとも、原因は朱乃にある。二人で一緒に下校しようということになったものの、その後、話題に困った朱乃が『時間もあるし、どこか行きたいところはない？ 案内するよ。観光客向けの駅前ギョーザ屋以外』と提案したのだ。すると、少し黙って考えこんだ呉羽は『辺りが一望できるところへ行ってみよう。できれば山がいいかな。ある程度、植生が濃い方がわかりやすいから』と妙なことを言い出したのだ。

色々気にはなったものの、結局朱乃は呉羽を（身近過ぎて名前も知らない）近くの山に案内することにした。

平野部との標高差は三十メートルもない低い山なので、呉羽は余裕綽綽だったが、朱乃はこの通りの有様である。疲れて、気も立ってきて、言葉も荒くなる。

とはいえ、呉羽におんぶしてもらう程ではない。何とか、その前に

「……着いたよ。ここが頂上」

の一言で締めくくることができた。

もっとも、すぐに朱乃はその場に座り込む羽目になった。

呉羽は「ごめんね」と囁いた後、すぐにその小さな山の頂上から、周囲を見渡し始めた。朱乃は既に何度か見ている上、疲れて座り込んでいるから、これといった感想もない。だが、呉羽の目にはそこそこ明媚な光景が映っていることだろう。

ところが呉羽は

「ああ、そっか、海がないから、ずっと潮の気配がしなかったんだ」

と、やはり妙なことを言い出した。

ただ、『海がない』という事実は朱乃の胸にも何か響くところがあった。

「……そうね。宇都宮は海がない。だからかな、《閉じた世界》という印象があるのは……」

ぽつりと朱乃がこぼした。すると呉羽は驚いたように、

「冗談よしてよ。あたしの実家はもっと田舎だったんだから」

と、笑い、そして、饒舌に語りだした。

呉羽の故郷は『高志市』というところらしい。朱乃は得意な地理の知識を動員して、それが北陸の小さな地方都市だったことを思い出した。なるほど、いわゆる裏日本に当たる。交通の便はあまりよくないだろう。呉羽が語るには、さらに南の県境には三千メートル級の山脈が連なり、横断は困難を極め、東西の県境にもそれほどではないにせよやはり山々が交通を阻害する。唯一、北は海だが、湾になっており、しかも、それを抜けても日本海という『閉じた海』が広がっているのだ。



「教えてあげるわ。今時、田舎といえば、東北、あるいは沖縄、北海道という印象があるけれどもね——それは誤りよ。本当の田舎は北陸にこそあるの。何しろ、東北、あるいは沖縄、北海道は『田舎の代名詞』として、フィクションでの登場頻度が高いけれど、北陸にはそれすらないのよ！」

何故か朗々と力説する呉羽。

もつとも、高志が田舎であるというのは、統計でもはっきりして、人口の県境移動量が日本最下位だという。これは本州にあるにもかかわらず、沖縄みたいな南の島よりも、人間の出入りが少ないということになる。まあ、大したものだ。嘘か真か、県外ナンバーの自動車を見かけると、人々はそれだけで『あ、余所者だ』よせものと思うらしい。

ただし、

「変にごちゃごちゃしていなくて、わかりやすかったけどねー」  
ともいう。

元々、古志は水田ばかりな上、『海がある方が北で、でかい山がある方が南』という明瞭な目印がある。そこを第二次大戦で米軍が根こそぎ空爆していったから、今では平安京並みに区画整理され、水田が地平線（！）の向こうまで広がっている。しかも、高志ではただの田舎道が何故か立派で広い道路になる傾向がある。そんな——左右に広がる水が張られた田圃の——中を自転車で突っ走るのは、実に爽快だったという。

「田圃の足元には、どっかの馬鹿が捨ててった合成樹脂のプラスチックごみが散らばったりしてて、結構苛々させられるんだけどね」

そう言つて、呉羽は結んだ。要約すると彼女は『田舎よ田舎よ』と、ただ反復し続けたことになる。それも、やたらと愉しそうに、だ。結局呉羽は（田圃のごみ云々の部分を除いて）自分の故郷が好きなのだろう。つまり、

——結局この故郷を《閉じた世界》と見るのは、私自身に問題があるのだ。

そのくらいのは朱乃にもわかつている。

呉羽のような人間は、どんな世界であっても未来を切り拓き得るのかもしれない。

だが、朱乃はそんな風に生きる力のない人間だ。ただでさえ、時間が流れ、年齢を重ねる毎に、残された可能性、進みうる選択肢は減っていく。それなのに、朱乃は何一つ事を成しておらず、何一つ積み上げていない。当然、成功の約束は皆無で……しかし、失敗の種子だけは確実に存在している。

そんな力なき人間にとって、未来とは、現在よりも劣化し、悪化した世界でしかない。

——閉じていく未来……か。

未来を思う度に世界が閉じていく感覚に襲われるのは、あの女性の影響なのだろうか？

「ねえ、あの朱乃……」

突然、呉羽が不安を露にして、声をかけてきた。朱乃が「どうかしたの？」と続きを促すと、

彼女は「あたしは何ていうかうまく一言では纏められないけど……」と無意味な前置きの後に本題に入った。

「……変なことを考えていないよね？」

呉羽は真顔で尋ねていた。

\*\*\*

「あんまり逆上のぼせしちゃいけません」と先生がいった。

「覚めた結果としてそう思うんです」と答えた時の私には充分の自信があった。その自信を先生は皆がっつりくねなかつた。

「すいませんね、私は変なことを考えまくりでしたよ。すっかり逆上していましたよ」

その夜、朱乃は寝台の上で読んでいた文庫本——夏目漱石の『こころ』——を閉じた。著作権はどうなくなっている上、あの夏目漱石の代表作だ。当然、ネットワーク上で幾らでも拾える。だが、昔気質むかしがたぎな朱乃はつつい印刷メディアを選んじまう。

「この作家の小説は、今ならライトノベルになるんだらうけれど……」

この『こころ』の《先生》が「あんまり逆上しちゃいけません」と言った理由は、その後の文章で明言される。過度の羨望を向けられても、その期待をいつか自分が裏切ってしまうのが怖い——かつて親友を裏切った《先生》はそんな不安で一杯だったのだ。

だが、朱乃は《先生》が『自分を偶像化するな』とも言いたかつたのではないかとも思う。すなわち、物語の主人公には、退屈な日常から逃れる術として、《先生》の偶像化を図った。しかし、それは所詮、現実からの逃避に過ぎない。それ故に《先生》は説教めいたことを言ったのではないだらうか。それに《先生》の方だって、厄介だらう。他人を偶像アイドルとして、崇拜するには楽でも、自分が偶像というものになるなど、夢想するだけで疲労するのだから。

皮肉のあまり、朱乃は乾いた自嘲を漏らす。

「そういうのは『青い鳥症候群』というのよ、呉羽」

あるいはシンデレラ・コンプレックスでもいいし、ユートピア願望と呼んでもいい。——要するにつまらない現実から逃げたいのだ。

朱乃は黒い下着姿で、寝台の上で寝転がった。滅多にしない運動で、いきなりの登山である。化け物じみた体力の持ち主である呉羽と違い、朱乃の四肢は悲鳴を上げた。別の本でも読もうとしたのだが、思った以上に身体が軋むので、朱乃は諦めることにした。

この朱乃の部屋を一言で表せば、『本で埋まっている』ということになる。

数えたことはないが、全部で千冊から二千冊はあるだらう。そして、これらの書籍の八割ほどは既に読破している。父の書齋や図書館などから本を借りることも多いことを考慮すれば、

自分は歳の割に読書家だと思う。

——私に友達がいないのは本ばかり読んでいるからなのか、あるいは友達が少ないから本ばかり読むのか……はい、循環論に陥って、立証不可能。ついでに無意味。わかっている。そんなことはわかっているのだ。

物語の中で、『謎の転校生』という小道具がいつの頃からか、多用されるようになったのかは知らない。が、それが実に便利な小道具だということはわかる。転校生というのは、全く別の学校からやってくるのだから、自分たちとは違う文化の持ち主である。ただ連続するばかりの日常に入り込む異分子である。

彼女の言葉を借りれば、それはある種の『異世界』の源泉であり、その接触は『異世界へ召喚される方法』といえなくもない。

ここまでは現実においてもよくある話だ。しかし、物語の中では『謎の転校生』はさらに有効に機能する。

物語の主人公というのは平凡な人生を歩んできたという設定が多い。読者の共感を呼ぶための処置だ。しかし、単なる『平凡な存在』で終わるならば、物語を読む必要は薄い。せつかく、読者の貴重な時間を奪ってまで、物語に付き合わせるのならば、読者のような『平凡な存在』は絶対にできないような『特別な経験』を主人公にさせるべきだ。

しかし、ここに矛盾が発生する。

主人公は『平凡な存在』なのだ。であるならば、少なくとも、物語の開始時点においては『特別な経験』を経ているとはいけない。何しろ、『特別な経験』を経ているからこそ『平凡な存在』である。

そして、この矛盾を解決するために『謎の転校生』は有効に機能する。経験は環境に左右され、人間にとっての最大の環境はやはり人間である。つまり、主人公が『特別な経験』がないのは、周囲の人間もまた『平凡な存在』であるからだ。逆に言えば、隣人が『特別な経験』を持つ、『平凡な存在』に非ざれば、主人公もまた『特別な経験』を持つことができる。勿論、主人公の周囲には当初『特別な経験』を持つものはいない（だからこそ、主人公は『平凡な存在』なのだ）。そこへ『特別な経験』を持つ『謎の転校生』がやってくる。そして、彼——いや彼女の方がいい、それでもできれば美少女の方がいいだろう。誰しも美少女は好きなものだ——に触発され、『特別な経験』を持ち、『平凡な存在』から脱出できる。

物語において、この『謎の転校生』は、文字通りの異世界へ召喚される方法なのである。上手くできていると、朱乃は思う。それ故に、この『謎の転校生』は物語で多用される。勿論、この『謎の転校生』の部分を『地球にやってきたばかりの異星人』やら、『ある日突然自分を戦いに巻き込んだ超能力者』やらに置き換えても、話は成り立つ。

——そう、仮に『微妙に言動がズレて、住所が怪しくて、部屋に押しかけたら、炭素結晶繊維の硬糸が張ってあったり、アラブ人のオジさんと同棲(?)している今時ポニーテールな

外部生』であつても、ね。顔もさほど悪くないし。

人付き合ひの悪い自分が呉羽に対しては積極的なのは、多分、そういう機能を彼女に求めているからだろう。あるいはあの怪しい上に妖しい御さ青とかいう女に、のこのこ付いていったのも同じ理由からだろう。

だから——「……変なことを考えていないよね？」と呉羽が言った。

だから——「あんまり逆上のぼちやいけません」と先生がいった。

わかっている。そんなことはわかっているのだ。

現実の呉羽は『謎の転校生』ではない。主人公には《先生》が格段優れた聖人君主に見えたとしても、実際の《先生》は友人を裏切ってしまったことを悔やみ、日々を無気力に生きた挙句、自殺してしまうような矮小な凡夫だったように……。

転校生にしる、外部生にしる、現実世界における彼女たちも結局のところは、異世界へ召喚される方法ではない。少々育った文化に差異はあるのは事実だが、しかし、所詮同じ日本で育った身である。それは本当にちよつとした違いでしかない。だから、往々にして、転校生も外部生も半年もしないうちにその学校の文化に溶け込んでしまう。

——では、呉羽は？

これについての解答は保留せざるを得ない。

たしかに、彼女はどこか異質なところがある。そうでなくては、いきなり何の罪もない路上の壁に殴りかかるわけがない。

しかし——やはり、彼女は人外の存在ではない。只の人間なのだ。少なくとも、彼女はそれを望んでいる節がある。だからこそ、この学園に入学してきたのかもしれない。それ故に朱乃の言動を気にした。いや、勿論、彼女が朱乃の内面をすべて把握しているはずはない。ただし、おぼろげに察知はしているようだ。そうでなくてはあんな言葉が出てくるわけがない（正直、どうしてこのわずかな期間で朱乃自身は韜晦しているつもりの欲求を呉羽は察知できるのか——本当に化け物なのではと勘繰りたくなる）。

そして、だから、呉羽は朱乃に釘をさした。

当然だと思ふ。実際、朱乃自身でも馬鹿げていると思ふのだ。

結局、朱乃は一時学級に蔓延はびこった『あたしって、靈感が強い方なの』とかほざいては『あ、あの人が憑いているよ』と人を指差す馬鹿女と大差がない。そんな朱乃を呉羽は嫌悪すらしているのかもしれない。

「いや、考え過ぎかも」

朱乃は自分が呉羽の言葉を深読みし過ぎている可能性を考慮した。あれは呉羽が何気ないつもりで口にしたのかもしれない。仮に呉羽が朱乃の欲求に気付いていたとしても、それを嫌悪

までするとは限らない。非日常に憧れるなんて、思春期にはよくある話だ。その程度は許してくれるかもしれない。そして、そういう部分を受け容れるつもりで——だから、朱乃が呉羽の異質さを知っていても——友達付き合いをやるうとしていいのかもしれない。これは朱乃の願望が混じっている推測ではあるが、しかし、それは可能性の低さを意味しない。

「私と違って、心が広そうだからなあ……呉羽って」

中学時代に、その手の自称靈感少女を空気も読まずに罵って、ひんしゅく響燈を買った朱乃とは大違いである。あの頃の朱乃は己の限界をわかっていない身の程知らずであるが故に、他者への配慮にも欠けていた。

「でも、今は先が見えているのよ——世界には私の介入する余地が無い——ってね」

先の考察にしたところで、多分、自分が生まれる前に幾千幾万の物好きたちの手によって繰り返されてきた『お約束』に過ぎない。

ギンギシと軋む身体を動かして、腕を伸ばし、鞆の中から、一枚の紙を取り出す。

数学、四十七点。

「私、ひよつとして、正答率五割を切ったのは初めてかしら？」

独り呟き、くつくつと自嘲する。

笠宿学園はお嬢様学校である。お嬢様——すなわち、上流階級の娘が、金の力で貧乏人を除け者にし、自分たちだけがよりよい教育を受けるための学校である。そして、上流階級の金持ち連中というのは往々にして不平等を正当化しようとするものだ。

前近代においては、その正当化の理由にしばしば血統カーストが持ち出された。善き血統に産まれたものには、それに相応しい生活を送る権利があるとされた。豊かな貴族の子は豊かな貴族、貧しい農民の子は貧しい農民として生きねばならなかった。それが社会の摂理であった。こういった摂理はどこの国にもあったが、インドなどでは理論体系化され、その人生において、血統カーストに相応しい人生を送ったものは、輪廻転生した後、次の人生においては、より善き血統に生まれ変わることができるまでされた。

こういう風理屈をつけて置けば、上流階級の金持ち連中は安心して、豊かな生活を送ることができた。この理屈を皆が信じている限り、貧乏人が自分たちに刃向かう恐れがなくなるからだ。

また、朱乃から見ると、こういうシステムは貧乏人にとっても悪い話ばかりではない。

何故なら、貧しい生活を送ることで、貧乏人は来世の幸福が保証されるからだ。勿論、そんなものはニーチェなら『弱者のルサンチマン』であると看破するだろう。実際、嘘八百である。

しかし、それを信じるものにとっては真実にもなるはずだ。そして、『お前は貧乏人に生まれたから、苦しんで苦しんで、人生をの楽しみを一つたりとも味わうことなく、死んでいくんだよ。

来世？ 馬鹿、そんなのある訳ないだろう。お前にはこれから先、死ぬまでも、死んでからも、何も希望なんてないんだよ』と言われるのと『あなたは貧乏人に生まれたから、これから



先、辛いことがたくさんあるでしょう。ひよつとしたら、死ぬまで、いいことはないかもしれません。でも、希望はあります。今は貧しくても、清く正しく生きてさえいれば、来世では幸せな人生を歩むことができるのです』と言われるのとどちらがマシなのだろうか？

努力して、豊かになればいい？——なるほど、いかにも三食昼寝つきの人生を歩んできたものの言いそうなことだ。しかし、本当に貧乏な場合、その努力することがそもそも難しかったりする。貧しさ故に、栄養失調で視力を失ったり、戦争で手足を引き千切られたり、勿論、学校などは行けないので、文字が読めなかったりする者がどう努力すればいいというのだ？

……いずれにせよ、近代に入って、この構図が変わった。

正当化の理由に実力や効率を持ち出されるようになったのである。

要するに、金持ちが金持ちであるのは、金持ちにはその実力があり、しかもその方が効率もいいからだ——という理屈だ。機械システムの仕組みを知っている人は、それを理解する実力があるから、高い給料を得て、金持ちになれるし、その機械を使った方が他の人もより効率よく色々なものが作れて、みんな幸せ——という構図である。上手い構図だと思う。たまに『そんな金持ちの嘘だ』と言い張る貧乏人も出てくるが、金持ちが『じゃあ、自分でやってみろよ』と返したら、困るのは貧乏人の方だ。実力のない人間が機械をいきなり触っても、それを正しく動かせるわけがない。機械が動かないと、食料の流通などが止まって、結局、人が大勢死ぬ。多くの革命の後に餓死者が頻出するのはそのためだ。そして、そのことを貧乏人もわかっているから、滅多なことでは逆らわない（あるいは昔から、こういう構図はあったと思われるが、それが近代では強く意識されるようになったのだと朱乃は考えている）。

またまた、金持ちが有利な世界であるが、しかし、この世界では金持ちが安泰であるとは限らない。金持ちが金持ちでいるためには、実力があって、しかも、その方が効率もよくなってはならない。とどのつまり、有能でなければならぬ。おまけに貧乏人も貧乏人で這い上がるうと努力しているから、うかうかしていると金持ちは相対的無能になって金持ちでいるための資格を剥奪されてしまう。

だから、金持ちは自分たちの子供を有能にするために配慮する。それが金持ちであり続けるための秘訣であり、そのための手段が教育——最初にも言ったがこの塋窟学園のような『お嬢様学校』なのだ。

しかし、そこまで、四方八方手を尽くしてもらっても、やはり、おちこぼれというものは出てくる。例えば、本ばかり読んでいる文学少女で、国語や社会の成績はずば抜けているが、理数系がまるで駄目な奴——要するに二宮朱乃はその一人だ。

「このままだと大学は文学部になる。でも、今時文学部なんて、国際関係学部やら、人間社会学部やらの漢字四文字の学部と大差ないからなあ」

これは非常にまずい状況である。

有り体に言って、お先真っ暗である。

いや、それどころか、留年の危険すらある。

かつて、この手の中高一貫校は、往々にして、成績不良であっても惰性的に進学させる傾向にあった。いわゆる『女の子』は無知でも許されたし、金持ちの『お嬢様』なら、さらにその傾向が激しかった。

だが、それはまだ血統カーストが生きていた頃の話だ。

今は違う。男女同権であるから、義務も当然平等に課せられる。女であっても無知は許されないし、無能は忌むべき存在でしかなかった。そして、この学園はそういう『近代』を前提にした『お嬢様学校』なのだ。

したがって、相応しい実力に満たないものは容赦なく振るい落とされる。

実際、中等部から、高等部へ上がる際に、一割程の生徒が退学している。勿論、家庭の都合という奴も多い。しかし、実際にはその影で留年という屈辱に耐え切れず、この学園から逃げ出した者たちも多いことを朱乃は知っている。

この学園の厳格さは必要なものだ。

留年に耐えられず、退学した者として、居残ろうと思えば居残れたのだ。少なくとも、教師達も消極的ながら、それを望んでいる。そこから、逃げ出したのは本人達の怠惰だ。屈辱を力とし、学業に励めば、最終的には高みに到達できるはずだ。

しかし、この理屈もかつてように素直に受け入れられるものではない。

いずれにせよ、今の朱乃は知っているのだ。

実力主義というのは、結局のところ、実力のある人間を幸福にするだけあって、万人の幸福を保証するものではない——力なき朱乃のような人間には苦痛でしかないと知っているのだ。

勿論、力があれば、話は別だ。確固たる力があれば、幸福になれる。自分の望むように生きていける。笑って人生を歩むことができる。先に述べたように学力に限った話ではない。なんでもいい。確固たる力さえあれば——。

「確固たる力か……呉羽にはそういうのがあるんだろうな」

それとも、この想いも幻なのだろうか？

\*\*\*

翌日。

やはり、時間は何事も無く過ぎていく。

変わったことと言えば、件の社会科教師がまた暴落した株価を嘔いていたことぐらいだ。彼によれば、近頃の値動きは絶対おかしい。おかしいと思ったら、どっかの誰かが大量に空売りをしていた。昨日なんて、この学園の株に逆日歩がついたぐらいだ。そんな大量の信用売りが出るほど、この学園は株を刷りまくっていたのか——と、朱乃は驚愕したが、彼にとっては安

心材料らしい。一定の利ざやは持っていていられるかもしれないが、いずれ、買戻しがあると思うので、今日の彼は昼飯奮発らしい。

……という自慢話に、思わず教室の隅々から『さっさと授業を始めて下さい』との声が上がってくるくらいに平和だった。

呉羽との関係にしても同じこと——。

昨日の帰り際が気になったものの、それは杞憂だったらしい。

朝いつものように登校すると、呉羽はいつものように自分に手を振ってくれたのである。

たったそれだけのことなのだが、朱乃は心底安心した。勿論、大袈裟な挨拶を好まない朱乃は軽く会釈をしたのみである。

しかし、それで呉羽はわかってくれるはずなのなのだ。

が、放課後になるとたちまちその安心は揺らいだ。

——宇津野美弥

という少女がいる。内部生組でも有名な部類に入る生徒だ。朱乃と同じ高等部新一年であるが、朱乃と違い、明朗で快活だった。しかも、バスケ部の次期主力で髪は短く背は高めな美人で——要するに朱乃とは正反対のいかにも人気な女の子だった。実際、中等部時代からバレンタインデーにもらうチョコの数は、学園一と噂されている。そして、今年初めて同じ学級になった朱乃から見ても、その噂は決して嘘ではないと思わせるほどに魅力的な女の子だった。

その宇津野美弥が教室で呉羽と話をしていたのだった。

朱乃が用を足すために放課後すぐに席を離れて、教室に戻ってくると、二人が和気藹々と談笑していたのである。廁かわやに行く時、呉羽は付いてきたがったのだが『そういうの、嫌いな』と朱乃は断固拒絶し、彼女を教室で待たせていた。しかし、それを今、朱乃は猛烈に後悔していた。

呉羽も宇津野美弥も、共に机に腰掛け、実に愉快そうに語り合っていたのだ。

しかも、宇津野美弥はバスケ部のユニフォーム姿であった。言うまでもなく、長い手足が丸出しになるし、胸元からもブラがちらちらとみえる造りになっている。あの御さ青とかいう女の衣装とは違い、それはあくまでも機能性を追求した結果であるものの、露出の高さはいい勝負で、おまけに生地は透き通るほどに薄い。

——……着替えたなら、さっさと部活に行きなさいよ、宇津野美弥。今はあなたも一年なのだから、きちんと準備して先輩方を待ち受けるのが礼儀でしょう？ 第一机に腰掛けるなんて、行儀が悪いわ。淑女としての自覚に欠けるのではなくて？

朱乃が腹立たしさのまま、心中で口を尖らせていると、

「うーん、やっぱり、宇都宮って、都会だよね〜」

という呉羽の言葉が耳に飛び込んできた。どうやら、転入生らしく土地柄ネタで話しこんでいたらしい。ちなみに、この呉羽の意見に対し、宇津野美弥は

「そう？ 宇都宮って、都会かしら？」

と、朱乃と似た疑念で返す。

たしかに、都市の基準をシステムの機能分化と定義するなら、十分に都会と言えるかもしれない。また、呉羽の実家と比べれば、宇都宮は田舎とは言い難い。だが、朱乃や宇津野美弥は、その気になれば、いつでも東京に行けるのだ。だから、宇都宮がさほど都会とは思えない。ところが、呉羽は

「いやいや、都会だって。女の子のスカートが短い！ 学校の制服で、フトモモが見えるって、これは素晴らしいことだよ」

と、上品とは言い難い反駁をする。面白い冗談だとも思ったのか、宇津野美弥は「えー、でも、うちの学校のは長いよー」とケラケラ笑いながら相槌を打つ。

「勿論、これはこれでいいの。セーラー服に短いのは邪道だからね！ 膝丈までのスカートにきっちりぴったりの靴下こそ王道！ でも、他校のブレザーで短いのを見かけるとああいうのもいいかなーと思わない？」

力説する呉羽。おいこら、私と話している時より、気楽そうに見えるぞ。

すると、宇津野美弥は突然、それまでの無邪気な笑みを消し去った。代わりに妖艶な雰囲気漂わせ、妙なことを言い出した。

「ふーん……そ、じゃあ、こういうのはどうなの？」

そして、宇津野美弥が脚を組む。四肢の長い宇津野美弥が高い椅子となった机の上でそんなことをやっているものだ。長くて白くて引き締まった脚——特にフトモモ——が剥き出しになって、実に目のやり場に困る類の光景が繰り広げられるはずだ。

二人から離れた朱乃の位置からでも、それがわかるのだから、眼前にいる呉羽にはさぞや刺激的な姿になっているだろう。

さらに、宇津野美弥は二度も三度も脚を組み直した。

呉羽の顔が赤くなるのが視力の悪い朱乃にもわかった。しかも、呉羽は顔を上に上げながらも、その目をしっかりと下に向けている。

そこで、宇津野美弥は急にニヤニヤと笑い出し、「どこみてんのよー」と、呉羽を軽く叩いた。無邪気な笑み故に先程の妖艶さも失われており、それは『女の子同士の軽いじゃれ合い』の相を成していたが、呉羽の頬が紅潮しているのを朱乃は見逃していない。

我慢の限界だった。

——……呉羽のアバズレが……！！

という憤りのままに朱乃は二人に近づいて行った。

ところが、近づくほどに二人の会話が耳に入ってくる。

「館山さんって、ちよつとヤラシイところがあるよねー。絶対A B型でしょー」

「んー、惜しい。実はO型」

「えー、全然O型には見えないよー」

「あはは、よく言われるー。ねえ、宇津野さんは？」

「ふふ、当てて見て」

「んーと、B型！」

「外れ〜。正解はA型でした〜」

「あー、でもわかる気がするなー」

その時の呉羽の笑顔に、朱乃の怒りが萎えた。代わりに、頭がガンガンしてきた。思わず、脚が止まる。

しかも、呉羽は顔を宇津野美弥に向けたまま、腕だけ伸ばして、朱乃に手招きをした。どうも、呉羽はとつくに朱乃の存在に気付いていたようだ。相変わらず異様に勘がいい。

だが、宇津野美弥はそうではない。怪訝に思い、周囲を見渡し、ようやく宇津野美弥は朱乃の存在に気付く。

彼女は朱乃を見た瞬間、非常に微妙な表情をした。

しかし、さすがだ。宇津野美弥はすぐに笑顔を作り、呉羽と同じく朱乃を手招きし出したのである。

——ルビー・ギリスではギルバートには釣り合わない……なんて、『赤毛のアン』じゃあるまいし。妄想に過ぎないわね。

第一、二宮朱乃はアン・シャーリーほど優秀ではない。

朱乃は「ごめん」と呟いて、その場でくるりと回って、彼女らに背を向けた。

逃げていると思われたくないので、あえてゆっくりと二人から離れて行った。

\*\*\*

これでいいはず——と、朱乃は自らに言い聞かせた。

中等部の時、朱乃は同級生たちと、東京で開かれていた《ベネチア硝子展》とやらに行ったことがある。同級生の一人が『きっと愉しいから』と朱乃をしつこく誘ってきたので、渋々付き合ったのだ。そして——その結果は最悪だった。

『どう思う？ 綺麗だよね？』と尋ねてきた級友に、朱乃はいつい本音をこぼしてしまったのである。

『……わからない。こんな光り物のどこがいいわけ？ 隣でやってる《孔子展》の方がずっと面白そうだわ』



その直後、壮絶な沈黙が級友たちの間に炸裂した。

今では反省している。だが、その時の朱乃はその《ベネチア硝子展》のあまりのつまらなさ故にまともな精神状態ではなかったのだ。大体、麦酒も豚肉もないベネチア文化のどこに価値があるの？——云々、余計な台詞までグダグダと語ってしまった記憶までである。

それ以来、その級友たちと共に出かけることは二度となかった。ただでさえ、友人が多いとはいえない朱乃はますます一人で過ごす時間が長くなった。

下手に興味のない話に関わってもろくでもない結果に終わるだけ——それがその時朱乃が得た教訓である。

まして、今度は血液型である！ 以前のベネチア硝子については、たしかに百円均一販売店で売っている品と、あの棚で偉そうに飾られている品の使用価値がどう違うのかという極めて深遠なる問題があったものの、その製法や技術などの点には見るべきところがなかったわけではない。

しかし、今度は血液型である！ その上、それをモトにした性格分類ときている！

迷信、疑似科学、宗教室の屁理屈、気にするのは自意識過剰な証拠——それ以上何を語ればいい？（星座やら風水やら、マイナスイオンやらタキオンエネルギーやら、水からの伝言やら、フィギュア萌え族やらゲーム脳やらの話題にも参加すればいいのか？）

勿論、朱乃は知っている。そんなことを口にすれば、以前とは比べものにならない破局が待ち受けていることを。靈感の話の時もそうだったが、あの少女たちとて、別に本気で血液型が性格に影響するとは思っていない。ただ、話題のきっかけになれば、場を持たせることができればいいと考えているに過ぎない。

空気を読んでいるだけなのだ。

朱乃にはできないことだが、それが普通ののだ。

一時期の朱乃はそういう風潮に激しく反発していた。空気を読むとか、場の雰囲気に合わせてとか——そういうことで己を曲げることを極端に嫌っていた。実のところ、朱乃も薄々感じてはいたのだ。靈感の話の時も、ベネチア硝子の話の時も。本音を語るべきではないと。本音を語れば、皆の反発を買うと。

だが——その《空気》に逆らいたかったのだ。

周りに合わせて、己を曲げることが媚態に思えて仕方なかったのだ。

だから、我意を貫こうとした。

すると、人は朱乃の周りから去っていった。

……結局、己の望むように生きていくには、朱乃はあまりにも無力だったのだ。

それでも、今はいい。所詮は学生の身、親の金で飯を食っているのだから。

しかし、社会に出ればそうはいかなくなる。己の力で日銭を稼ぎ、飯を食わねばならなくなる。その時、周りに人がいないようでは絶対に困る。周りに人がいないということは、他人が

ら、必要とされていないということなのだから。

繰り言になるが、もし朱乃に確固たる力があるならば、その力を以って、他人を引き寄せることもできるだろう。しかし、力なき朱乃は媚び諂って、他人の哀れみを買うしかない。

結局、『確固たる力』のない朱乃は媚態を作って生きていくしかないのだ。

——呉羽なら、そういうものに左右されない生き方ができる……はずなのに……。

だが、現実の呉羽は他人の『下らない話』に迎合するところがある。今日のあれはその典型だ。いや、そもそも、ああいう『下らない話』が嫌いではないのかもしれない。いやいや、それどころか、あの手の『下らない話』を嫌がるのは朱乃だけで、実は皆、『下らない話』が大好きなのかもしれない。

第一、朱乃はわかっているのだ。己の苛立ちが、呉羽への嫉妬と失望——いずれも朱乃自身の身勝手な感情に過ぎないということが。仮に

——呉羽はあんな女のどこがいいのよ。

と憤ってみても、

——二宮朱乃に欠けている全てがいいのよ。

と朱乃はすぐに答えを脳裏に浮かべてしまう。

そりゃそうだ。

宇津野美弥は、いかにも、女つたらしな少女である。

短めの髪に、さわやかな少年のような顔立ち。メリハリはそこそこだけど、運動部らしいがっちりした筋肉質な手足。何よりあの闊達な雰囲気。

……基本的に陰鬱な朱乃とはえらい違いである。

それに宇津野美弥は朱乃のように偏屈ではない。柔和だ。しかも、知識が広範。故に話題が豊富である。今回は軽薄な話に終始しているものの、その気になれば、まったく違った話し方も可能。いやまったく、賢いとは、ああいう人間を指すのだろう。

……自分の好きな話題でなければ、極端に無口になる朱乃とは対極にある。

さらに言えば——呉羽は根の部分で、弱気かつ内気なのだ——と朱乃は看做していた。呉羽はたしかに一見すると、宇津野美弥に近い（二人とも『若草物語』のジョーに似ていると朱乃は思う）。言うなれば、陽性の外面をしている。だが、しかし、呉羽はその内面において、意外と陰性が強い。それだけに内外共に陽性が強い宇津野美弥へ呉羽が惹かれるのは自然に思えた。

「……はあ」

朱乃は自分が極めて非建設的な気分であることを痛感する。

下駄箱まで来た朱乃は、そこでふと姿見に気付いた。人間一人をすっぽり映し出す大きな鏡である。登校したばかりの生徒が身だしなみを最終確認するための気遣いなのだろう。そこで思いついた。

——いや、あるいは……、やはりフトモモの差か？

朱乃は顔を引き締め、鏡に向かい、己のスカートを捲り上げる。

そして、その下に隠れていた自らのフトモモを凝視してみた。

自慢ではないが、白くて細い。ただし、それは不健康さの表れでしかない。こういうのが好きな者もいるだろうが、呉羽も女の子だから、やっぱり、宇津野美弥みたいな固い筋肉の上に柔らかい脂肪が乗っている健康的なフトモモの方が……。

「待て。何をやっているんだ。私は？」

朱乃は慌ててスカートを下ろす。危ないところだった。もし、今のを誰かに見られていたら、朱乃は破滅に向かって一直線だったろう。すると、次の瞬間……。

「「キヤー」」

と黄色い声が響いた。もしや、見られた？——と、一瞬朱乃は最悪の事態を想定する。

だが、それは杞憂だったらしい。

その歓声というか、嬌声というか、よくわからない少女たちの声は校門前に向けられていた。距離も近いし、どの道今日はこのまま帰るのだからと、そのまま靴を履き替え、声の向いていた場所に向かうと……

校門前に彼女がいた。

あの南山御さ青が立っているのだ。

しかも、彼女はこちらに視線を向けてニコリとした。さらに、大きく息を吸い、よく通る声で、

「おーい、アケノーン！」

と尋常ならざる呼び名を口にしようとした。

朱乃の体温は暴騰し、キヤミとショーツが一瞬でぐしょぐしょになる程の汗が噴き出した。

何だか、こちらに向かつて、手を振っている気がするが、きっとそれは気のせいだろう。気のせいに違いない。二宮朱乃は生まれてこの方、そのような三人称を許した覚えはない。だから、あれはきつと南山御さ青に似た他の誰かなのだ。あんな長い黒髪を曝け出している女なんて、そうそういるはずもないが、それでも、あれは他人の空似に違いない。さもなくば、朱乃の知らない『アケノーン』なる第三者が奇遇にも朱乃の近くにいて、彼女はその『アケノーン』なる未確認生命体へ、なんらかの……。

「おーい、二宮<sup>にのみや</sup>アケノーン！ デートしよー！」

——何で、苗字だけ、正確な発音なんだよっ！

今すぐ怒鳴りつけたがったが、朱乃はグツとそれを堪えた。これで、彼女を無視し、裏門からこっそり脱出する案は叩き潰された。朱乃の下の名前を知っている人間は少ない。『朱乃』アケノーン』という発想にたどり着く人間もそう多くはなかった。しかし、二宮という苗字程度

なら同級生には知れ渡っている。だから

「二宮アケノーンで何?」「ほら、二宮さんのことじゃない?」「二宮さんって?」「ほら、あの高等部一年の……」「え、じゃあ、あの方はその二宮さんとデートしに来たってこと?」

「ねえー、あたしー、あなたのことが忘れられないのー」

とか訳のわからないことを連呼している。

——……あれを放つて置くわけにはいかない。

その絶望に似た焦燥が朱乃を突き動かした。

全力疾走で校門前まで駆け寄り、とりあえず、彼女を壁の影へ——校舎側から見えない位置に誘導した。

「一体、何しにきたんですか? というか、また、何という格好を」

思わず、朱乃は目を逸らした。それは南山御さ青の服飾を至近距離から観察する羽目になったからだ。それもここまでくると羞恥というよりも懊悩ゆえにだ。

彼女のその時の格好を一言で表すと

——色々間違ったOLさん?

となるのだろう。

上は薄手半袖で無地白地のブラウスが一丁。

下は黒のミニスカートにやはり黒のサイハイソックスと赤いハイヒール。

言葉にすると簡単だし、実際、装飾など皆無に等しいが、やはり派手だ。

いや、装飾が皆無ゆえに派手というべきか? 例えば、飾り気のない清潔感あふれるブラウスは、それ故に肢体のメリハリを露にしている。黒のミニスカートは臀部を隠すのが精一杯の短さの上、深々とスリットが入っており、せめて、何か飾りを付けて隠してくれないと危ないところまで見えそうになってしまう。

しかも、南山御さ青は、当然のように、ブラウスの上と下のボタンをわざと幾つか外している。そのため、以前と同じく、胸元とお臍が丸見えで、目の毒だ。おまけに黒のサイハイソックスと赤いハイヒールについては、存在自体が挑発的だった。

しかも、そのまま、目線を逸らしていると巨大な物体が視界に入る。校舎にいる時には、壁の陰になって気付かなかったが……。

それは緑色のジープだった。

JEEP——米国クライスラー社の四輪駆動小型車の商標。元々軍用偵察車両として、第二次大戦中に開発され、その優秀さ故にその名称も遍く知れ渡り、現在では小型軍用車両の代名詞。ライセンス生産、コピー生産などの形で、世界中に普及している。

……とはいえ、お嬢様学校の校門前には、絶対普及していなかったはずだ。

いや、そりゃあ、ワゴン車とのあいこのこみたいな『家族で野山にお出かけするためのピカピ

カのジープ』なら、あるかもしれない。だが、こういう丸みも屋根もない『陸上自衛隊が災害派遣に出かけるための傷だらけなジープ』は見たこともなかった。

少なくとも、その堅牢な設計——というか、ゴツイ外観は、壜窟学園にはあまりにも似合っていない。何しろ、ここは元伝道系学校であって、元特務系学校ではないのだから。

——……ベタだ……。でも、いいのかなこれ？

おそらく、彼女はこのジープに乗ってきたのだろう（ちなみに『おそらく』と付けたのは、今このジープには誰も乗っていないのだから、この御さ青が運転してきたと考えるのが妥当なもの、この手の軍用車両は、こんなハイヒールでも運転可能なのだろうかという深遠な疑問にぶち当たったからだ）。

つまり、彼女は軍用車両をお嬢様学校の前に路上駐車していることになる。しかし、昨今の学校は不審者に厳しい。そして、よくも悪くも排他的なこの学園はその傾向が強い。元卒業生とはいえ、奇矯な行動は即座に不審者認定へ繋がる。こんなモノで乗り付ければ、警察に通報されてもおかしくない。いや、むしろ、未だ警備員が出てこないのが、遅いくらいだ。

「あの……まずくないですか、それ？」

朱乃としては、精一杯の言葉だった。だが、御さ青は、

「そう？ これでも穏当な格好をしてきたつもりなんだけどなあ」

と、己のブラウスの端を摘み上げる。

——いや、私はあなたの服装ではなく、その車の方をですね……というか、その格好もいや、以前に比べれば、たしかに露出は控えておられるようですがね……。

しかし、朱乃にはそれ以上どこから指摘しようか冷静に検討することは出来なかった。

何しろ、御さ青は摘んだブラウスをそのまま胸元近くまでめくり上げていたのである。

そんなことをしたら、下着が見えてしまうではないか——と朱乃は危惧したが、すぐにその心配は皆無であることに気付いた。

「……ま、またっ、ノーブラですかっ？」

「あ、欲情した？」

「いいから、さっさと、それを隠してください！」

「はい」

そういって、御さ青はブラウスから指を離し、再びその布地が彼女の肌を危うく覆った。

以前のキャミソールは、仮初めにも『下着』に分類されうるものだったから、まだノーブラでも許されるかもしれないが——いや、どうみても、あれはブラ機能があるキャミソールではなかったが、一応——ああもうどうでもいい！

「大体、その服装も扇情的であることには変わりなく……」

「どの辺りが？」

「そりゃあ……」



と、そこで、朱乃は困った。

何しろ、あっちこっちが扇情的なので、どの辺りなどと特定することは難しい。しかし、と  
りあえず、胸は駄目だ。色が白で、ノーブラなんて、濡れたら透けて丸見えではないか。いや、  
これは薄手なので、濡れてなくても、危険極まりない。

自然と視線が彼女の足元にいつてしまう。

すると、今度は朱乃の目に黒のサイハイソックスに飛び込んできた。

そこにはミニスカートとの境界に作られたフトモモの食い込みが……朱乃とは対照的な御さ  
青の女性らしい肉付き故のフトモモの食い込みが……。

——……ぜ、絶対領域？

「あ、朱乃ちゃんてば、フトモモ好き？ フトモモ星人なんだー、それなら、そうと言ってく  
れば……」

「……帰ります」

「あああ、待ってよー。君が愛おしくて仕事帰りにわざわざやってきたっていうのに——」

「仕事？ お、お仕事……なさっていたんですか……？」

「……さりげなく、失礼ね。こっちで仕事が見つかったからわざわざ帰ってきたのよ」

「実家、この辺りなんですか。……ちなみに、何のお仕事を？」

「プー太郎。今風で言うフリーターっていうやつね」

「そ、そうですね……」

朱乃の予見は当たっていた。しかし、こう大きな胸を張って揺らして答えられると……。

「……重ね重ね失礼ですが、具体的には何の仕事をなさっているのですか？」

「今は指導員インストラクターの仕事をしているよ、まあ、臨時バイトだけだよ」彼女はわざとらしく肩をすくめた。

「いやあ、疲れるよ。馬鹿で無能な上に可愛げのないガキばかりだからさ」

こういう言い方をされると、朱乃は気になる。己もまた『馬鹿で無能な上に可愛げのないガ  
キ』と見られているかもしれないからだ。

「では、何故そんな仕事を？」

「昔、似たことをやっていた時はさ。相手が聡明で有能で、その上に可愛げのある素敵なコだ  
ったの。それが愉しかったのよ。色々とオイシかったしね」

「でも、柳の下の泥鰌どじょうだったと？」

「そう。君みたいな、聡明で可愛い女の子が相手なら、あたしもやる気出るんだろうけどなあ」

——結局勧誘が目的なのか？

と朱乃は勘繰ったものの、それ以上に彼女が朱乃のことを『聡明で可愛い女の子』と言った  
ことに、いささか気落ちした。賞賛されているのだし、悪意もないのだろう。だが、彼女は正  
直である。朱乃を『有能』だとは言わなかったのだ。

「……わかりました。今日はお付き合いします」朱乃は自分が自棄になっているのを自覚した。

「それで、デートって、どこに連れて行くおつもりですか？」

「え、そりゃあ、勿論……」

「言っておきますが、私の家は門限が厳しいですよ」

朱乃は予め選択肢を狭める。すると彼女は露骨に困惑し、苦惱し出した。そして、

「な、ならば、せめて、水着」と、御さ青は絞り出すような声で思いついた途端に、明るい顔になった。「そうだ。水着だよ、水着！」

「……それ、場所じゃないでしょうか？」

「嫌だなあ、海だよ、海」

「ここは内陸県で、しかも、今は春先なんですけど？」

「う、うーむ、今から沖繩に行くのは面倒だし……はっはっはっ、温水プールという文明の利器があるじゃないか！」と、沈んだり浮かんだりを繰り返したものの、御さ青はめげずに下心を全力全開にする。「何？ 水着がない。よろしい、お姉さんが買ってあげよう！ ついでに替えの下着も買ってあげよう。あ、二人でランジェリーコーナー巡りというのでもいいかな？」

「……やっぱり、帰ります」

——これ、迷惑防止条例とかで取り締まれないのだろうか？

懊悩のあまり、朱乃の頭はまたガンガンしてくる。

ところが、そんな中、突然、御さ青は

「あれ？」

と、素っ頓狂な顔をした。それを形容するのは難しいが、中身とは逆に清楚な顔立ちの南山御さ青が、突如髪を解いた時の呉羽に似た気配を強めたのである。挙句、彼女は

「あー、そっかー、ふーん」

とか意味不明なことを言い出し、

「ごめんっ。急用ができた」

と、『ガバッ』と頭を下げた。ちなみにこの『ガバッ』というのは、彼女の尋常ならざる黒髪が揺れる擬態語であり——漂った芳香に朱乃は不覚にもかどわかされかける。

そして、ハイヒールと思えないほどにテキパキした動きで、ジープに乗り込み、

「じゃーねー」

と手を振りながら、車を走らせ去っていった。

朱乃は今のは何だったのだらうと訝む。そして、その直後に、

「……もしかして、私、体よく振られたの？」

という果てしなく理不尽な思いが込み上げてくる。しかも、彼女に振られたことに暗鬱になっている自分に気付いた。

——……馬鹿。人恋しいから、誘われたら、ノコノコ着いて行きたがるなんて。これじゃ只の尻軽でしょ。呉羽のアバズレをどうこう言えない。

思わず朱乃は長息と自嘲をこぼす。

「……私は……相手に惚れさせる予定だったんだけどなあ」

中々、人生はうまくいかないものだ。そんなことを考えていると、

「朱乃ーっ！」

と、背中から声が届いた。その主は——呉羽。

振り向くと彼女が校舎の方から駆け寄ってくる。やはり呉羽は俊足で、あっという間に朱乃の間近まで近づいた。

「……何か用かしら？」

朱乃はなるべく冷静な態度を心がけたが、その声調は明らかに冷徹になっていた。

「いや、その朱乃が……」

呉羽は口籠る。彼女がこの程度の疾走で呼吸を乱すはずがない。つまり口籠るのは、後ろめたさ故——と朱乃は決め付けた。

「……朱乃が美しい黒髪の素敵なお姉さまと話していると聞いて……」

「あら、それだけ？」朱乃は嫌みったらしく小首を傾げる。

「……えーと、あの、しかも、そのお姉さまは双眼鏡オメガラスで覗き見ただけではつきりとわかるくらいに……その……『ないすばてい』だったと聞いて」

「……へえ」朱乃は流し目で呉羽を一撫でし、「呉羽もその『ないすばてい』なお姉さまに興味津々ってわけ？」

「え、そりゃ、あたしだって『ないすばてい』なお姉さまに……」

朱乃はまなじりを跳ね上げる。途端に、何かを読み取ったらしい呉羽の口調は急転する。

「……は……興味が無いわけでもないけれど、勿論、第一義には朱乃が不審者と話しているというのが心配だったんだよ」

そこには中々嬉しい台詞が混じっていた。だから、

「ふうん」

と、朱乃は呉羽に腕を伸ばした。細い指でおしがい頤を掴む。「へ？」と素っ頓狂な声を出す呉羽。その顎をクイツと持ち上げる。何故か呉羽は陵辱される乙女のような表情を浮かべたが、朱乃はそれを無視して、詰問した。

「……私のことが心配だったのね？」

「……当然。友達だもん」脅え、怯み、しかし、呉羽ははっきりと答える。「それに、真面目な話、なんか妙な感じもしたしさ」

「……そう」

朱乃はそっけなく返事をしたが、真摯な呉羽の言葉に、少しばかり感激していた。普段の朱

乃なら訂正を促す『真・面・目・な・話・、・なん・か・妙・な・感・じ』という曖昧な表現も見逃した。訝しんだものの、自分に比べると観念的な呉羽なりの真意なのだとなんげか納得したのだ。

朱乃は手を離して、とびっきりの笑顔を作る。

「呉羽、デートしましょう」

一息吐こうとした呉羽は「え？」とまた間抜け面をさらした。

「嫌なの？」

「いやいやいや、大歓迎だよ」

上目遣いで尋ねてやると、呉羽は簡単に墜ちた。――扱いやすい奴、くすくす。

「で、いつ？」

「今から」

「……果断だね。で、どこに？ この前の山登りでは迷惑かけたし。どこでも付き合うよ」

「温水プールよ」

呉羽の顔は下心よりも戸惑いに染まっていた。

\*\*\*

「畜生っ！」

朱乃は立ち泳ぎのまま、プールの壁を殴りつけた。

「……は、はははは……」

同じく立ち泳ぎの呉羽は既に水に入っているにも関わらず汗がドクドク流れてきた。

何しろ、朱乃からはとんでもなくどす黒い空気が流れてきているのだ。

――いけない、これはいけない……何とかして、空気を変えないと！

精一杯、明るい顔と声を作って呉羽は言った。

「いやあ、でも、凄いいじゃん！ バタフライって、難しいでしょ？ それが得意だなんて、朱

乃ってば、本当に技巧派テクニシャンなんだね！」

「……別に得意ではないわ。でも、クロールで負けたら、言い訳できないでしょ。だから、バ

タフライにしたのよ」

「ふお、フォームが綺麗だったよ！ あたしのなんて平泳ぎというよりもカエル泳ぎだから

ね！ 羨ましいよ！」

「……でも、そんなあなたのカエル泳ぎは私のバタフライよりも遥かに速いのよね」

「あー、うーん、そのー、ごめんなさい」

思わず、呉羽は謝ってしまった。

五十メートル自由形一本勝負。朱乃はバタフライ、呉羽はカエル泳ぎに近い平泳ぎ（という

か、呉羽は犬掻きの延長で自得したこれ以外の泳法など知らない）。

そして、その結果は——呉羽の圧勝。

一般にバタフライとは、クロールに次ぐ消耗を強いる代わりに、クロールに次ぐ速度をも誇るらしい。逆に平泳ぎは、最も消耗の軽い泳法であり、その気になれば数キロを泳ぎきれる反面、速度においては最も劣っている（というか、平泳ぎを高速泳法として改良したのがバタフライなのだ）。

つまり、五十メートル程度の競泳なら、バタフライは平泳ぎに対して、圧倒的に有利なのである。

しかし、それでも、朱乃は呉羽に惨敗した。

そして、それが朱乃にとっては屈辱であり、苛立ちの元凶らしい。

「じゃ、じゃあ、く、クロールで勝負してみる？」

「不要よ。この調子だと、私のクロールとあなたの犬掻きでも私の負けみたいだから」

呉羽の提案を一蹴し、朱乃は一人で水から上がっていった。

——な、なんで、こんなことになってしまったのだろう。

\*\*\*

当初の呉羽はウキウキしていたのだ。

女の子二人で水遊びなのだ。きつと——あんなことやこんなことをして、きゃ、きゃ、うふふ、うわあ、すごい、やだ、そんなに……——となるはずだと期待で胸がいっぱいだっただの。

いや、実際、当初はいい雰囲気だった。

更衣室が個人用で、着替えを目撃できなかったのは痛恨だったものの、互いに用意してきた水着姿を見せ合う瞬間は、まさに至福の時だった。

呉羽は着替え易さも考え、思い切って、迷彩柄のセパレート——もつと言えば、ビキニにした。呉羽としては、相当頑張った水着である。自意識過剰だとわかっている、周囲の視線とスースーする臍が結構気になる。だが、同時に

——これなら、朱乃にも負けないっ！

と意味不明な対抗心を燃やしてきた。小さい頃から、いくら食べても太らない体質だったし、ここ最近はどうな体質でも太りやうがない生活だった。首の傷跡は水着と髪で隠れている。だから、見られても困ることはないのだ——と、65のB以上にはどうも、大きくならないらしい胸を張って、水場へ出てくると——。

朱乃が凄いハイレグを平然と着こなしてきたのだ。

たしかにそれは、形式としては黒のワンピースともいえ、ビキニの呉羽よりおとなしいとも言えるのだが——。



だがしかし、脚部の食い込みが凄かった。ハイレグの脚を長く見せる効能が、元々朱乃が佩びていた大人びた雰囲気を強めている。それでいながら、小柄な朱乃の肉体はあくまでも初々しく——その対立する要素が少女らしからぬ色気を醸し出している。いや、そもそもその水着の描く線はかなり際どく、瘦躯を隠すには甚だ危うい。腸骨稜の辺りまでが完全に露出している。これで朱乃の華奢な腿をきちんと隠しきれぬのか、期待と心配が……。

呉羽は思わず唾を飲む。

ついでに背中や胸元も大胆に開いており——ようやく確証が得られたが、やはり朱乃は着痩せする類だった。同じBでも朱乃は呉羽よりも身長が十センチ以上も低いのだと見せ付けてくれる。……今まで呉羽は大和撫子の美点は、小型軽量高性能であると考えており、ぶっちゃけた話、小さな女の子はAAぐらいがいいと思っていたが……

——こ、これは認識を改めざるをえない。

思わず唾を飲む呉羽。だが、朱乃はそんな友人の戦慄を一顧だにせず、

「じゃあ、行きましょ」

と、さっさと水辺に向かつて、傲然と脚を進めた。

置いてぼりを食らった呉羽は慌てて、「う、うん」と朱乃に駆け寄る。形としては、朱乃の横に呉羽が並んで歩くことになる。ちょうど姫君に付き添う側女そばめの位置だ。

そして、朱乃の水着が食い込みのために、側面の布地もかなり絞られていることに気付いた。これはつまり、横にいる呉羽からすると色々丸見えな感じで——ドギマギである。

「どうしたの？」

「い、いや、大胆だなあとと思って」

「なあに、スクール水着でも着て欲しかった？」

そう言って、凄艶な笑みを浮かべる辺り、朱乃には間違いなく妖婦の風がある。

——都会の女の子は怖いよー。

呉羽が心中で恐れ慄いていると、朱乃はすつと顔色を変えて、その細く小さな体に真剣みを漂わせる。

「悪いけれど、ご要望には添えないわ。私、脚の付け根が締め付けられていると、どうもキックに集中できない性質なの」

「キック？」

どうして、水着で蹴撃キックしなければならぬのか——と呉羽が怪訝に思っていると、朱乃は簡潔に語ってくれた。

「泳ぎ難いということよ」

「そ、そうなの？」

「じゃあ、五十メートルでいいわね？　ちょうど、第四と第五が空いているから、三分で準備運動を済まして始めましょ」

「え？」

\*\*\*

……と訳がわからないまま、呉羽は朱乃の競泳に付き合わされたのであった。どうやら、朱乃の水着には布地を節約する以外にも機能性があるらしい——と呉羽が理解した頃には、勝敗は決していた。その朱乃は今プールサイドで椅子に座っている。

水気が落ちた朱乃の肌は、いつも以上に美しい。輝くような美少女とはこういうことをいうのか——と呉羽はちらちらと覗き込みつつも、悦んでもいられなかった。

薄々わかつていたことではあるが、朱乃は相当に負けん気が強い。

その朱乃は優雅な仕草で鈴を鳴らし、店員さんと呼ぶ。呉羽も慌てて近くの椅子に腰を下ろす。

濡れた水着が椅子にくっつく感触に慣れ始めた頃、店員さんがやってきた。

店員さんが朱乃を見て頬を染めた——そのことに気付いた呉羽なんとなく嬉しくなった。これだけ綺麗な女の子が過激にカッコイイ水着姿なのだ。彼女の反応は当然だと思ふ。うんうん、わかるよ。朱乃ってば美人だもんね——という一方的な共感で店員さんを見る呉羽の頬がほころぶ。

「……何をデレデレしているのよ」

雷鳴を思わせる朱乃の一言。静かで淑やかな声が不思議と響いた。

——い、いけない。何かを間違えたみたいだ。

それだけはわかったので、冷や汗だけがだくどくと流れてしまう。とはいえ、呉羽には女心がわからない。いや、ほら周りにオンナノコ少なかったから、その辺りの機微が……ああああああああ、我ながら貧しい青春……。

呉羽の頭がぐるぐる回って対応できずにいると、朱乃は「まあ、いいわ」と店員さんに目線をやった。

「珈琲一つお願いします。エスプレッソで」

「ひっ、ひん。か、かしこまりました！」

店員さんは不思議な了解をする（たが、その気持ちは痛い程わかる）。呉羽は同情しつつも「あたし、クリームソーダをお願いします」と注文した。

「で、では、珈琲一つ。少々お待ちくださいっ！」

そして、店員さんは処女か脱兎かわからぬ有様でその場を立ち去った。

呉羽は「あ、あの。クリームソーダも忘れないで下さいね」とその背に声をかけるのが精一杯だった。

「……手を抜くの、止めたら？」

「え？」

「体育の授業」

唐突に話を変えた朱乃であったが、呉羽にはその意味がわかった。

呉羽は体育の授業で手加減している——と朱乃は非難しているのだ。

——…あれ、あたし、墓穴を掘っちゃった？

呉羽は今の競泳でその非難が見当違いでないと証明してしまった。今まで体育の授業では、あらゆる種目において常に『平均』に収まるように手を抜いてきたのに。

——しまった。

今回は比較対象が朱乃しかいない。故に目算が狂ったのだ。計測したわけではないが、態度からして、朱乃の泳ぎはそこそ速いのだろう。ところが呉羽はそれを知らなかった。だから、文学少女で運動には縁がないだろう朱乃に勝つくらいなら不自然ではない——と、ついつい、本気を出してしまった……。

——…もしかして、そのつもりで泳ぎに来たの？

呉羽のまだ乾いていない体からさらに冷や汗が出てくる。

「う、うん。でもさ、いくらいい成績をとっても周りに引かれたら嫌だから」

「空気を読んだということ？」

「う、うん……」

「そうやって、いつも八分の力で逃げ続けて、いつの間にか八分が十分にならないようにね」

「はははは、昔、同じ事、言われたよ」

呉羽は朱乃の鋭い視線に、悲しくなる懐かしさを覚えた。

「でもさ、朱乃だって似たようなものでしょ。繰り返になるけれど、あれだけしっかりバタフライができるんなら、本当は運動も得意なんじゃないの？」

確かにバタフライは現行泳法最速のクロールと紙一重の速度を出せる。さらに極めれば、消耗の点でも、平泳ぎ並も抑えることも可能だ。まさに究極の泳法である。

が、その割に愛好者は乏しい。

その理由は『体得が難しいから』の一言に尽きる。クロールや平泳ぎはある程度、フォームが崩れていても、一応は前に進む。だが、バタフライは厳密かつ正確なフォームを身に着けていなければ、まるで前に進まない。それどころか、息継ぎすら難しい。現行泳法で基本とされる四種の中で、しばしば習得が最後になる由縁だ。

とどのつまり、最高難度の泳法なのだ。そんな玄人向けの技を使いこなすのだから、朱乃の泳ぎは中々のモノである。朱乃の髪の色素が薄いのも塩素水の影響——それだけプールで泳いだきた証なのかもしれない。

「大したことないわ。昔、水泳教室に通っていたしね。そもそも、壘窟学園は小等部でクロール、背泳ぎ、平泳ぎ、バタフライ一通り習うわよ」

「え、全員？」

「例外はあるけどね。九割は習得していると思う。第一、バカ高い授業料は何に使われているの？」

金を出している分、知識や技能の習得を要求している——と言いたいらしい。

「ミーム||リッチ……かあ」

呉羽はほつりと呟いてしまった。すると、

「ミーム||リッチ？ ジーン||リッチの言い間違い？」と、朱乃は食らいつき、訝しむ。ところが、彼女は少し考え込んだ後、自ら答えを出した。「いや、待って、遺伝子ではなく模倣子？ あ、そういうこと？ 例えば、鈴木一朗は野球のミーム||リッチって訳ね？」

「……何でわかるの？」

「わかるわよ。模倣子と言えば遺伝子の派生語でしょ。文化的遺伝子というか後天的遺伝要素とか——とにかくその手の概念を模倣子と呼ぶ。先天的特長——黒髪とか、近眼とかが——が核酸分子によつて、親から子へ遺伝するように、後天的特長——日本語を話すとか、箸を使うとか——も環境によつて、教育者から学習者へと模倣されていく。前者を遺伝子と呼び、後者を模倣子と呼ぶ。そうよね？」

「そ、そうだけど……」

「で、リー・シルバーの提唱した《遺伝子の富裕層》とは——高い金を使って、遺伝子を弄つて産み出された故に、先天的に優秀さが保証されている存在よね。まあ、最近では《デザイナーベビー》という呼称がより一般的かもしれないけど……」

無論、ジーン||リッチもデザイナーベビーも先天的な優秀さが保障されているだけで、実際にその先天能力を開花させられるか否かは、その後の教育次第である。また、そもそも、塩基配列が多少異なる程度で、人間の能力が劇的に変化するわけがない（実際、人類一人一人の遺伝子は皆異なっているが、同じような環境で育てれば、やはり同じような能力になる）ので、今後ジーン||リッチが創造されたとしても、当面は多少潜在能力が向上した子供が産まれてくるだけというのが通説だ。

「提唱者のリー・シルバーも『当初、考えていたのは身体や精神の健康だった』みたいなこと書いていたわよね。純粹な技術的観点からも、重度の単一遺伝子異常の回避は、ヒトの遺伝子操作の中で、最も容易であり安全であり確実であり、かつ効果的だろうし」

「書いていたって……読んだの？」

「ええ。リー・シルバーの『複製されるヒト』でしょ？ 随分前に流し読みしただけだから——何しろ、もうアレはある種の『古典』で派生作の方を先に読んじゃって——細部の表現は怪しいけれどね」

「……あ、暗記しているの？」

「だから、不正確な記憶だと言っているでしょ」

信じがたいことを朱乃は平然と語る。

——ああ、でもヤヒヤーや七美にも似たところがあるよなあ。

さらに言えば、あの《幼馴染》も同じことをやってのけていた。結局、呉羽はそういう人間に惹かれる性質なのかもしれない。しかし、これは……、

「……いずれにせよ、《遺伝子の富裕層》という概念が階級社会——人間同士の素朴なコミュニケーションを断絶させる時代——の到来を予感させる言葉として、生み出された。この

《模倣子の富裕層》という言葉も同じ不安が込められているんじゃないの？」

「……本当に朱乃は凄い」

「何が？」朱乃は馬鹿にされたかとも思ったのか、ぶっきらぼうに言った。

「だって、《模倣子の富裕層》って言葉、あたしの知り合いの知り合いが即興で思いついた造語なんだよ」

それをどうして一瞬で理解できるの？——呉羽は驚嘆と疑念に満ちる。だが朱乃は

「考えれば、わかる話よ」

と即答だった。そして、つまらなそうに言葉を重ねる。

リー・シルバーの提唱した《遺伝子の富裕層》も呉羽の又知り合いが提唱した《模倣子の富裕層》も共通する問題を抱えている。

それは子供の意思が反映されることなく、親の力（特に経済力）などの外的環境によって、《富裕層》になれるか否かが決まってしまうということだ。

先天的な優秀さを確立する塩基配列の操作には親の力が必須だ。同様に、後天的な優秀さを確立する教育環境の調整にも親の力が必要だ。双方共に言えるのは、そこに子供の自由意志の介在する余地はなく、ただ外的環境に流されるだけであるという点だ。

いや、ヒトの遺伝子操作が黎明に過ぎず、《遺伝子の富裕層》がいかほどの実力を持つのが不明瞭なのに対し、《模倣子の富裕層》は既に赫々たる実績を上げているといってもいい。

先にあげた鈴木一郎などはその典型だろう。

彼は三才の頃から野球を始めた。小学三年からは、三百六十五日中、三百六十日は、激しい練習に打ち込んだ（一週間で友達と遊べるのは、六時間以下だったという）。そして、小学校を卒業するまでには全国大会で優秀な成績を残し、絶対に自分はプロになる、自分はプロになれる、自分はプロになるべき人間だと夢を語っていた。

そして、彼は予言の通りにプロになった。まさに計画通り、予定通り、おめでとう。

教育と努力が見事に報われた存在——《模倣子の富裕層》だ。素晴らしい。

……逆に、十二の少年が『イチローみたいになりたい』と願っても、それは叶わないということなのだ。どれ程血を滲む程の努力を重ねても『もう手遅れです。残念でした』ということなのだ。

それでも野球などはまだましかもしれない。



野球好きな親という困難だが、唯一の条件さえ、満たせば、同じ野球の《模倣子の富裕層》となることも不可能ではない。無論、《模倣子の富裕層》が必ず成功するとも限らないが、その確率はグンと上がるし、少なくとも鈴木一朗と同じ土俵に立てる。

だが、これが鍵盤奏手や庭球選手の《模倣子の富裕層》ともなれば、その難度は激甚たるものとなる。理解のある親——という絶対条件は無論のこと、教育環境に金がかかるからだ。親子共に熱意があっても、金がなければ、門前払いという実に絶望的な話になるからだ。

——以上の内容を、朱乃は実にすらすらと語った。

「……やっぱり朱乃は凄い」

「やめてよ」朱乃は本気で嫌そうだった。「こんなことを考えるのは、多分私自身がミームリッチの成り損ないだからよ」

「成り損ない？」

「別にうちは大金持ちというわけでもないよ。でも、その中で私は大切にされて育てられた。で、あるにも関わらず、私は何も掴んではない」

「……朱乃？」

「私は何一つ成し遂げていない。私には何一つ確固たる力がない」

呉羽が思わず口を開きかけた瞬間に、件の顔を真っ赤にした店員さんがやってきた。

自然と話が中断される。

彼女の運ぶ皿の上を見ると、珈琲——と、クリームソーダがかろうじて乗っていた。

「お、お待たせてしまいましたっ。珈琲一つ。エスプレッソでございます」

あからさまに狼狽している店員さんは、指を震わせながら朱乃の前に珈琲を置く。その際、視線は朱乃の水着姿に注ぎ込まれていた気がするものの、当の本人は気に止めることもない。

そのまま、朱乃は一部の隙もない優雅さで珈琲を手にとった。そして、そこで初めて店員さんの存在に気付いたかのように「ありがとうございます。もう下がって結構ですよ」と伝える。

店員さんはその一言で悦びに震え「で、では失礼します」と踵を返した。

その気品溢れる光景に呉羽は感動した。己の知る日本とは明らかに異質な空間がそこにはあった。

——凄いなあ。貴族的っていうか、女王様っていうか……。

「……店員さん、クリームソーダも置いていって下さい……」

「あ、そうでした」

ちよっと涙目の呉羽の指摘に店員さんは機械的に対応した。クリームソーダは眼前に置かれる。気のせいかな、幾分ぞんざいに思えた。だが、呉羽はここが踏ん張りどころだと堪える。先程の朱乃の仕草を精一杯真似て『ありがとうございます』と——言おうとした瞬間には既に店員さんは遠く彼方だった。

「……………」

ええ、まあそりやそうですよね。あたしだって、朱乃みたいな美人さんを前にしたら、多分、舞い上がりますよ。職業倫理をちよっぴりおろそかにしちゃう事だって、あるかもですよ。

だが、胸に宿った劣等感は消えない。呉羽はちよつと愚痴をこぼしてしまった。

「……ねえ、何で、泳ぎに行こうなんていったの？」

「あなたの水着姿を見たかったから」

「え？」

「それに久々に泳ぎたい気分だったのよ」

衝撃の呉羽には、やはり、気に止めることもなく——朱乃は惚れ惚れする流麗さで珈琲に口を付ける。

「ナンパされても呉羽がいれば大丈夫でしょう？」

「いや、この装備じゃあ、相手が九ミリの豆鉄砲でも致命的……って、ナンパ？」

「そ。ここは会員制だから、本当に面倒な連中は入ってこないけれど……煩わしい連中はいるからさ」

「ナンパって、道端で見知らぬオンナノコに声をかけて、あわよくばお持ち帰りしようとするあのナンパ？」

「他に何があるのよ？」

「いや……あれって、実在するの？」

少なくとも呉羽にとって、ナンパとは漫画やドラマの中の話だった。ヤヒヤーに教えたあの文句も、その都市伝説を参考にしたに過ぎない。

ところが朱乃にとっては揺るがぬ日常の一部らしい。

「そりやするわよ。何しろこの私ですら、されたことがあるんだから」

と心底呆れたようだった。同時に、その朱乃の物言いが吐き棄てる様だったことに呉羽は気付いた。

積極的に頑張っている人間とは分野を問わず魅力的だ（と呉羽は思う）。それがナンパも例外ではない。まして赤の他人が自分に好意を抱いてくれたのなら、それは喜んでしかるべきだ。

それをこの様に毛嫌いするのは余程飽き飽きしている証拠だろう。

……つまり、朱乃はそれだけもてるのだ。

「むしろ、呉羽はされたことないの？ 私みたいに根暗な娘よりも、何かと明るそうな呉羽の方が標的にされやすいんじゃないの？」

「う、うーん、あたしの実家は高志でも田舎だったからねえ。『見知らぬオンナノコ』というのがそもそも貴重で」

「皆、顔見知りって訳？」

「そうでもないけどね。でも、ナンパよりは夜這いの方が身近な世界だったからなー」

すると、朱乃はきっかり珈琲を一口啜ってから、推測を述べた。

「……古式ゆかしい原始共産的農村社会ということ？ 乱交乱婚が基本で子供が出来たら——どうせ『父親』という観念は希薄だし——家族ではなく地域全体で育てる柳田國男的世界が広がっていたと？」

「いやいやいやいや、さすがにそこまでは……」

裏日本の辺境とはいえ、所詮日本の一部である。近代にきちんと汚染されており、呉羽を含めて貞操観念も浸透している。特に呉羽は新興住宅団地に住んでいた時期が長く——都会風の教育を受けた高学歴の人間と付き合っていたので——いわゆる近代的日本人としての自我を確立している。『高志弁』よりも共通語の方が得意なくらいだ。

ましてや、処女チェリーの呉羽は夜這いもナンパも日本では未経験である。

………なんだか、また悲しくなってきた。

呉羽はだが挫けずに明るく笑顔を作って尋ねてみる。

「ね、ナンパって、どんな感じ？」

「どんな感じ……って、私、男性恐怖症よ」

そも、こういう會員制の温水プールで声をかけてくる連中は、一通りの礼儀は整えてくる。そんな連中ですら煩わしいと感じるのは、ひとえに朱乃が重度の男性恐怖症だからだ。故にそんな風に聞かれても困る——いつもの明晰さで朱乃は語った。

「朱乃が男性恐怖症？ あ、それ冗談？ さすが都会は冗談も洗練されているねー」

「……」

すると何故か朱乃は沈黙し瞑黙し出した。気のせいかな、顔には皺が寄っている。

——あ、あれ……どうしたんだろう？

呉羽は毎度の如く戸惑った。いくら考えても、呉羽には朱乃の不機嫌の理由がわからない。

自然と会話が途切れる。

まずいなあ——と呉羽が沈黙に耐えられなくなった頃、

「……私たちって話題がないわね」

と、意外にも朱乃が先に口を開く。しかし、そのさらりとした言葉に呉羽は困った顔をしてしまったと思う。

だから、「う、うーん、まあ、そうだね」と、曖昧な言葉を返す。

実のところ、呉羽の方ではその問題については承知していた。何度か果敢な挑戦を試みてもいた。

しかし、結果はすべて玉砕だった。

何しろ、朱乃と来たら、呉羽がせっかくハーバルとかヴィダルとかマシエリとかを一生懸命一夜漬けてから、

『ねえ、朱乃はどんなシャンプーを使っているの？』

などと尋ねても、つまらなさそうな顔で、

『太陽油脂株式会社。ソープなんかのスキンケアから、洗濯用も食器用も全部そこ』

と答えるのだ。ちなみにこの太陽油脂株式会社というところは洗髪用の石鹼などを製造している会社だ。化学合成されたシャンプーなどと比べるとどうしても高値になる石鹼のシャンプーを愛用している辺り、朱乃のお嬢様らしさが窺い知れるのは確かなのだが、呉羽としては次の言葉に困ってしまうのである。

——いや待てよ。

本当に彼女は『いわゆるお嬢様』なのか？ よく考えてみれば、呉羽は朱乃の素性について、詳しく知らない。勿論、どんな家の生まれなのかもだ。

思いのままに尋ねてみると、彼女は口ごもる様子もなくすらすらと答えた。

「元々は神社だったらしいわよ。確か椒ほかみ神社とかいう名前だったかな？ 何でも、この辺りじゃ、二番目に社格が高かったらしい」

「ああ、だから、二宮にのみやなんだ」そこで、急に呉羽の心が湧き躍る。「え、じゃあ、朱乃ってば、巫女さん？」

「……どこから、そういう発想が出てくるのが気になるわね」

呆れる朱乃。一方の呉羽は何か降りてくる。ついつい「……巫女装束を着たり、毎朝禊みそぎをしたり、そんなもって、濡れた白衣からは……」などとぶつぶつ呟いてしまった。

「申し訳ないけれど、そんな事実是一片たりともないわ」

何しろ、江戸時代までは専属の神職もなく、地域の氏子が交代で管理していたぐらい細々としたものなのだという。明治維新以後に、それでは格好がつかないということで、朱乃の先祖が専属の神職となった。とはいえ氏子からの奉納だけでやっていける規模ではない。幸いにも『幾ばくかの土地』を資本として持っていたため、片手間に農業を営むことで、何とか喰っていたが、GHQが猛威を振るっていた頃は、存続すら危うかったらしい。

ところが戦後の高度経済成長やバブルの地価高騰によって、状況は一変。その『幾ばくかの土地』の資産価値は急上昇。不動産屋任せの借家経営で、十分に飯を食えるようになったという。日本の最も典型的な小金持ち小金持ちの類だ。

——……ん、もしかして？

「そ、あなたの住所を疑ったのもそれが理由よ」朱乃は少し自慢げに謎解きを始めた。「あなたが学校に届け出た住所は確かに実在していたものだったわ。何しろ、私の家の所有する物件の一つで、何度か仕事の手伝いで部屋に入ったこともあるくらい。そして、只今、取り壊しの争議中——つまりはそれくらい古い物件」

便所も台所も共用で風呂はなし、あまりに長い使用期間故に水周り是不潔極まりなく、用を足すにも近くのコンビニに向く住人多数。当然、冷暖房もなく、おまけに日当たりも悪いため、衛生状態は最悪。その分家賃は安いので苦学生の類には人気だが……。

「とてもじゃないけれど、この学校に来るような階層の住む部屋ではない」

「朱乃は——階層とか、階級とか……そういう単語が好きだね？ ヤヒヤーと話してるみたい」  
「それは……別にどうでもいいわ」朱乃にしては珍しい不明瞭な言い方だった。そして、吐き捨てるように、「で、どうするの？」

「どうするって？」

「……口封じは？」

朱乃のその言葉に空気が一転した。

……とりあえず呉羽はなるべくチャラチャラした態度をとって見た。

「接吻はまだ早いんじゃないかなー、あたしたち」

「しらばっくれるつもり？」

「何を期待しているの？ あたし、朱乃とは友達になったつもりだったんだけど？」

優美な口調とは裏腹に、朱乃の手足は震えていた。呉羽にはそれが容易く読み取れる。

——怯えている。

それも理解できた。朱乃は聡明だ。間違はなく、自分などよりもずっと。

住所の偽装に気付いたのは、只の偶然だろう。単なる家の事情だ。しかし、呉羽が住所を偽装した理由については、彼女なりに推測しているはずだ。しかも、部屋で炭素結晶繊維の糸まで見ている。

呉羽たちの事情を把握しているとは到底思えないが、しかし、それが軽々しく口外できるものではない事は考慮しているのだろう。そして、それを他言するかもしれない朱乃をどのように処理するのか——その最悪の事態をも想定済みなのだ。

それ故に、彼女は怯えている。

呉羽としては自分が信用されていないことが、いささか、悲しくはあったものの——しかし、朱乃の判断は正しい。勿論、呉羽には朱乃へ危害を加えるつもりなどまるでないが、生き残るための選択としてはそれが正解なのだ。

本当に賢い娘である。

だから、わからない。

——どうして、彼女はその辺りのことを突つつくのか？

その辺りのことを放っておけば、二人は『仲のよい友達』でいられたはずだ。

なのに何故、わざわざ、自分の安全を脅かす行為に出るのだろうか？

単なる話の種——で済まない危険ぐらい十分にわかっているはずなのに……。

「別に問題ないわよ」呉羽は似合わないと思いつつも酷薄に言い放った。「あたしだけでも七つのでつち上げ話カバーストーリーが用意してあって、内五つは住所の問題を織り込み済み、あなたの証言があ



っても、三つは有効よ。お馬鹿なあたしと違って、ヤヒヤーの方はもつとたくさん考えているだろうしね」

\*\*\*

口封じを期待しているの、私は？——朱乃は思わず自問した。

今の呉羽が一切の凶器を帯びていないことは一目瞭然だ。

呉羽が着ると不思議と大人しめに見えるが、迷彩柄のビキニは露出度が高い。当然ながら、非露出部も体の線が丸わかりになる。

——綺麗ね。

朱乃は改めて思った。機能美を体現している手脚。言うまでもなく、贅肉が少なく、しかし、筋肉に欠けるわけでもない不思議な——長距離走選手に近い細身。骨組みがしっかりした肢体でありながら、少女そのもののしなやかさにも満ちている。肌は朱乃程きめ細かいわけではないが、とにかく若々しい。巧みに隠している(が、注視すればわかる)首の薄い傷跡を除いて、さしたる疵瑕もない。

——『傷の有無』が気になるけど、少なくとも、年齢的には自分と大差がない。

身に纏っている水着も形状こそ『三角ビキニ』であったが、スポーツブラのようにきつちりと胸部と臀部を固定する類で、呉羽の女の膨らみを抑え付けていた。元々お尻も豊満というよりは、引き締まっているので、骨盤の形を除けば、少年にも見える。

だが、それだけに見事な腰のくびれが目立つ。抑え付けられながらも、慎ましく自己主張する乳房と共に健康的な色気を醸し出している。

舐るように観察していると、呉羽は気付いたらしい。

嫌がられるかな——と思ったが、呉羽は逆に頬を染めて、縮こまった。

そして、慌てて目の前のクリームソーダをちゅーちゅーと吸い始め、朱乃のねっとりとした視線に気付かない振りを出した。

——……この初心さは擬態かしら？

いずれにせよ、今の呉羽は寸鉄一つ隠していない。

当然だ。先程の言葉も嘘ではない。そのために、泳ぎに来たのだ。

と、同時に呉羽がその気になれば、こんな小細工など一蹴できることも明白だった。

呉羽を永久に水着姿にしておけるわけでない以上、所詮はこの場凌ぎに過ぎない。帰りに呉羽が刃物を購入しないという保証はない。そも、競泳の結果を見ても眼前の肉体を見ても、自分と呉羽の差は圧倒的だ。呉羽の身体能力が極めて高い水準でまともまっている。ひ弱な朱乃が相手なら、徒手空拳は大した障害にならない。呉羽がその気になれば、一瞬で首をへし折れる。

朱乃はその恐怖を飲み込んで、本題に入った。

「じゃ、次はあなたの番よ」

「え？」

「私は自分の家族や過去を語ったのだから、今度は呉羽の番よ」朱乃は意識して、きつぷよく促す。「ほらほら、さっさと話しちゃいなさい」

「いやでもその……」戸惑う呉羽。

「大丈夫よ。私、友達いないから」

情報は流出させないと仄めかすと、呉羽はかなり暗鬱な表情を見せる。

「……お願い」

その朱乃の一言が決定打だった。呉羽はようやく重い口を開いた。

先日教えられたように、呉羽は高志という北陸の地方都市で産まれたらしい。それから、親の仕事の都合で、一度東京に引っ越してきて、その後、親が高志の郊外型新興住宅地に新居を立てたので、呉羽は再び生まれ故郷に戻ってきた。もともと、呉羽によれば、この頃の記憶など皆無に等しく、覚えているのは、六歳の時に高志に戻ってきてかららしい。そして、その住宅地がある白腹山しろはらやまという山の麓で、約十年を過ごすことになったという。小学校経由で中学校へと通い、その後、公立高校に（この辺りで朱乃は『なるほど、田舎なのだ』と思った）通い出すまで、高志を出ることはほとんどなかったという。

なんてことのない。普通の、日本のちよつと田舎の女子高生の略歴という感じだ。

ただし、朱乃は二点、気になった。六歳の時から、約十年高志を出ることがなかったというのなら、十代半ばからはそうでなかったという事になる。そして、口に出した後、少し顔に焦りが浮かんだが、彼女ははつきりと公立高校に『通い出す』まで、と言った。つまり、呉羽はこの埜窟学園高等部に通う以前に、一度『高校生』をやっていることになる。ではどうして、もう一度、高校生をやる羽目になったのか？

のらりくらりと誤魔化そうとする呉羽を無視して、冷徹に朱乃は指摘した。

すると、呉羽は渋々と「他言無用だよ」と、前置きした上で答えた。

「実は私……一度、高校を退学しているの」

「退学？」

朱乃は自分の顔が変わるのを自覚した。退学などそうある話ではない。呉羽の通っていた高校は偏差値的にかなり高水準だったようだが、それでも、公立学校だ。余程のことがない限り、留年ですら、考えにくい。ましてや、退学など……。

朱乃の疑念を察したのか、呉羽は両手を振って言葉を補った。

「ああ、自主退学だよ。いわゆる『一身上の理由』という奴だね」

「お金？」

「違う違う。本当にもっと個人的な理由。物質的ではなくて、精神的な……うん、人によってはどうでもいい理由。ヤヒヤー曰く、『教育のありがたみを何だと思っているのか！』——貧し

さ故に高等教育が受けられない人間のことを考えると、確かに下らない理由」

呉羽の口がどんどん重くなる。朱乃は自分が彼女の鬼門に近づいていることを悟った。

「……実はあたしには凄く仲のいい——いや、凄く仲のよかった幼馴染がいたんだ」

呉羽は思い出を少し悲しそうに過去形へ訂正した。なんでも、保育所で出会ったその幼馴染みは、呉羽にとって、最初にして最高の友だったという。

「中学の頃から、色々あって、ちょっと距離感……みたいなものはあったんだけどね。それでも、あたしはずっと好きだったの」

「……ふーん」

「もっと小さいころは文句なし仲が良かったんだよ。何せ、昔は結婚の約束までしたんだから！」

「……………へー」

何故だろうか、朱乃はその《幼馴染》が気に食わなくなってきた。

勿論、呉羽にそんな朱乃の不快感が伝わるはずもない。呉羽は頬を染め、うっとりとその《幼馴染》との思い出を語った。その語り方は、恋人との蜜月かのようなだった。実は『かのように』ではなかったのかもしれないと気付いた時、朱乃はさらに苛々してきた。とはいえ、激昂するわけにもいかず、しばらく黙々と呉羽のノロケ話を聞いていると……。

「……………ところどころ……」

という逆接の接続詞と共に、急に呉羽のでれ顔に翳<sup>かげ</sup>が差した。どうやら、本題に入ったらしい。朱乃の聞く姿勢も自ずと変わった。

「……………ところが……言わなきゃ、駄目？」

躊躇う呉羽の物言い。朱乃は多少ぐらついたものの、決然と頷いた。

「高校に入って、最初の秋にね。ある事件があったの。その事件で、直接の被害者になったのがその《幼馴染》でね——すぐにそのコは高校を休学、結局、そのまま、退学する羽目になっちゃったんだ」

「……………」

「すると、その高校であることないことが噂として、流れたり、あるいは腫れ物に触るように『いなかったこと』にされかけたり……」

「それが理由？」

「違う」呉羽は肩をすくめてあっさり否定した。「そういう雑音が耳障りだったのも事実。でも結局はあたし自身の問題だった。実際、そのコと付き合いのあったあたしの前で、無神経なことを言うような輩は少なかったし、数ヶ月もすると、存在そのものが本当に忘れ去れていったから」

「……………でも、呉羽は忘れられなかったんだよね」

すると、彼女は少し後ろめたそうに、視線を逸らした。「うーん、ある意味ではそうだったん

だと思ふ。あたしにとつて、やっぱり、その幼馴染は大きな存在だったからね。実際、その高校に——少し背伸びしてまで——入学したのは、その幼馴染がいたからだし、幼馴染がいなくなった以上、あたしにあの高校にいる理由は特になくなったから。ぶっちゃけた話をすると、背伸びしたツケが回ってきて、学力的に辛くなってきたしね」

最後の一文が半ば冗談だということは理解できたが、そういう一文を持ち出して、自嘲気味に笑った呉羽の心理はわからなかった。そして、呉羽は最後に「……まあ、いずれにせよ、今考えると、辞めたのはやっぱり極端だったと思う。でも、あの時は必死だっただろうね。多分……」と他人事のように話を結んだ。

「ちなみに……その事件って、何があったの？」

聞かない方がいい——朱乃の頭のどこかで、そんな警告が鳴り響いた。しかし、ここまで話してしまつた以上、呉羽にはもうどうでもいいことだったらしい。促すまでもなく、呉羽は次の言葉を紡いでいた。

「その幼馴染がね、悪の秘密結社に改造人間にされちゃつたの」

「……………」

絶妙の時期に朱乃の防水携帯端末が着信音を振りまいた。

「でもでも、幸いにも脳改造とかはされなかったから、その改造人間の力で、自身の復讐と社会の正義のために……って、あ、朱乃？」

……端末に目を通した朱乃が無言で立ち上がると、拳を握つての力説に入ろうとしていた呉羽は肩透かしを食らつたらしい。

「ごめん、さすがに門限に引っかけたみたい」

「え？」

「じゃあ、さようなら」

そう宣告して、その場から離れようと朱乃は立ち上がる。何やら、焦つたように呉羽は弁解を始めたが、朱乃は気に留めなかった。

「いや、だからさ。ほら、ちよつと前にあつた高志市でのIGFTL事件とかダイダラボツチ事件に絡んでいた悪の秘密結社に、あれ、そういえば、炯眼けいがん商会って、もう一部上場してたっけ？」

「自分で調べたら？」

ようやく辿り着いた個人用の更衣室。朱乃はそう言い放つて内側から鍵をかけた。

\*\*\*

暗い夜道と街頭の光の中、

——…結局、やってしまった。

と朱乃はいささか後悔していた。あの後呉羽を拒絶する形で、一人帰路に付いてしまったのだ。

考えてみれば、呉羽が易々と語れないのは当然だ。やたらと『武勇伝』を語りたがるチンピラとは訳が違うのだ。かつて本当に危ない橋を渡っていたのなら、そのことを『深い仲でもない相手』に話せるわけがない。

問い…では何故、自分はその事情を汲んでやることが出来なかったのか？

答え…呉羽に『深い仲でもない相手』と思われているのが悔しかったから。

——…いくら分析が冷静でも行動が激情に基づいては意味がない。

そもそも、自分の質問は好奇心に基づくものであってそれ以上の理由も必要もない。

呉羽が真剣に応えねばならぬ義務も義理もないのだ。

——私は甘ったれだな。

思わず溜め息が出る。

「はい」

そこに飛び込んできたのはお気楽な声。

顔を上げると、濃い紫に高砂百合が映える振袖。

それを纏うのは、異様な程の美しい黒髪の女性。

「……今までとは随分趣が違いますね」

朱乃がそう評すると、振袖の主——南山御さ青は清楚な顔立ちを崩し、ケラケラと笑った。

「いやあ、急いでお偉いさんと話すことになってね。こういう格好していると、オジサン相手にはウケがいいんだよ」

それで慌てて着替えたのだという。しかし、この短い時間に忙しいことである。

「それに和服って結構色っぽんだよ」

……また始まった。

「前のあわせでチラチラ見える肌の色に、実は露骨に表れる下半身の線、丸見えの足元——そしてうなじ！」

「あの……それ浴衣くらい薄着の話でしょう？ 今みたいな振袖だと、厚着だから肌蹴たり、体の線が出たりすることはまずないのでは……」

第一、この黒髪でどうしてうなじが見えようか？

その辺りの諸々を突っ込むと、彼女は途端に涙目になった。

「うううう、だってあのオジサンたち、やたら格式とかに拘るんだもん。訪問着並みの礼装



でない、十八番のいちゃもんが飛んでくるもん。本当はあたしだって、襦袢も裾除けも着けずに、素肌の上に直接浴衣一枚で来たかったのに……」

「……いや、それもどうかと思いますが」

まあ、確かに、この振袖は彼女に似合っていた。黒々と見事な髪を始め、和風な容貌にはぴったりの顔である。もう少し顔を引き締め胸が小さければ『小股が切れ上がった美人』にだってなれる。

しかし、そもそも、

「……南山御さ青さんは振袖なんて着ている歳なんですか？」

「おー、それは神をも恐れぬ質問だねー。色々な意味で」

「あ……すいません」

「いいよいいよ。十代なんてそんなものだし。あたしは神をも恐れぬ少女だし。そして、振袖とは未婚の少女が着るものだし」

「……は、二十歳以下だったんですか？」

「ん、どうしてそう思うの？」

「だって、車の免許まで持っているなら、確実に十八歳以上でしょう。十八歳以上の『少女』なんて、古代の律令制で定義される『少女』ぐらいしか思いつきませんが、それでも二十歳が限界だったはず……」

「ふふ、その少女の定義は誤りよ。とっても叙情的で魔法的な人が曰く『女の子は心がキラキラ輝いていれば、いつまでだって少女ですよ』だもの。実際あたしは未婚だしねー」

大きな胸を張って揺らして断言する南山御さ青——前回と違い、そこそこ厚着のはずなのに、それでもその動きはやはり伝わってくる。

その凄まじさに朱乃はただただ圧倒されるばかりだった。仕方がないので話題を変える。

「……で何か御用ですか？」

「私と一緒にどこかへ行こうよっ」

「お断りします。もう門限ですし」

「それはわかるんだけどさ。随分、落ち込んでいるみたいだし。正直放つては……」

「しかし、私はあなたを信用できません」

春先に相応しい冷たい夜風が駆け抜ける。

朱乃は即答していた。自分でも意外にも思った。

実際、御さ青は少し驚いた後、寂しげな顔を作った。

「……軽薄な女は嫌い？」

「一度目は偶然。二度目は必然。では三度目は？」

初めは本当に偶然だったのかもしれない。次は朱乃の学校を知っているのだから必然だったのだろう。では、今は？ どうして、放課後に分かれた彼女とそう都合よく再会できるのだ？

「あーやっぱり、ばればれだよねー」

そして、破顔一笑する御さ青。

その蓮っ葉な態度に、朱乃は最初に会った時からの疑惑を口にした。

「そもそもどうして私に構うんです？」

「あなたがあたしと同類だからよ」

「同類？」朱乃は身構えた。「私に下らない選民意識でも期待しているのですか？」

「——《朱》には染まれない。心根が《青》いつて事よ」彼女は小首を傾げながらも、真っ直ぐに朱乃の双眸を見つめる。「繰り言になるけどさ。あたし、そういう空気を読むのには自信があるの」

その透徹した眼差しに朱乃の口は動かなくなる。

「ま、いずれにせよ、あなたが拒むなら仕方がないわ。お別れね。残念だけど」

そう言って、彼女は手を差し出す。

別れの握手を求めているのだと気付くまでに少しかかった。

——そういえば、海外生活が長いみたいなのを言っていたな。

納得して、朱乃も手を差し出す。

二人の掌が触れ合い、互いに互いを握り合う。冷たく柔らかく滑らかな彼女の肌に、朱乃はドキリとする。その次の瞬間

——朱乃の身体は蜘蛛がピンで張り付けられたように動かなくなった。

「言ったでしょ。お別れだって——あなたを取り巻くすべてのものとのね」

\*\*\*

呉羽の携帯端末に電話がかかる。発信元は——朱乃だった。

ほとんど、儀礼のように携帯の番号を交換した二人であったが、朱乃からかかってくることはなかった。思い切って、呉羽からかけてみても、すぐに『何か用かしら？』と不機嫌な声で、簡潔で必要な情報のみを要求してくるのが常だった。

ただでさえ、友達からの電話とはいいいものである。しかもそんな朱乃からの電話である。

別れ際が何だか微妙だった今日なら、尚のことだ。これできつと関係も修繕できる——と呉羽はウキウキして通信を接続する。

ところが、端末の向こうから聞こえてきた声は、明るく弾んだ女のものだった。少女にして

は低く落ち着いた声の朱乃のものとは似ても似つかなかった。  
「はじめまして、呉羽ちゃん」